

第  
10  
号

ア  
ク  
ト  
ス

文  
芸  
集  
団  
A  
c  
t  
o  
s

平  
成  
二  
十  
三  
年  
五  
月

アラトスの夢の世界にたゆといし書籍の海の吾ひとしづく

大西亥一郎

※アラトス(Aratos)は、紀元前三世紀に活躍した古代ギリシアの詩人。古代マケドニアで活躍した。ギリシア神話の記述者。

はじめに

文学は文楽である。

日記は、それが結果として自己以外の人の心に響くメッセージか否かによって、文学と峻別される。言葉は命である。その言葉を、文学は文字という記号を媒体として表出する。記号である故に、その構成と判別に知性と経験を必要とする。とともに、組み合わせられた記号は、その記号以上の意味と感情を含み、一定の時間と空間に影響を及ぼすものとなる。

それを踏まえつつ、事実の伝達のみでなく人の思考・情感を伝えるもの、それが文学の誕生である。

したがって、文学は、いかなる形であれ、驚き・感動・好奇心・悲哀という「心を動かす」ものでなければならぬ。「文学は文楽である」という意味の「楽しさ」はそういうことである。

また文学は文芸であり芸である。良いものを取り入れて「消化して昇華」し、作家として常に技能内容を高めねばならない。

本誌は文芸活動を通じて文化芸術の振興と、それが個々の人生の糧となるように努めるアクトス集団の機関誌である。ために相互の研鑽・理解を深め、よりよい創作活動と、豊かな生涯を形成する内容を目指す。

本誌の構成は、短詞型(詩・柳歌・短歌・俳句・川柳)・小説・随筆・児童文学・紀行・評論などのすべての文芸ジャンルを含む。

多くの方の参加と、関係各位の協力を望む。参加同人の、苦しいが楽しい、コツコツと積み上げる個人的努力と、互いに刺激し成長し続ける「和」の、アクトス活動でありたい。

平成二十一年一月一日

アクトス会長・編集長 大西 亥



目次

鴨川閑話……柴小路秀麿	1
詩4編……大西裕子・令月	6
松庵二丁目……小野村新	11
10号までのあゆみ	19
水仙句と故郷……松田政雄	25
Typhoon 127号……足達光輝	28
りーくんと月……ゆきんこ	36
好きな匂い……水田竜子	38
我が小さき孫・子らへ 辞典を引くということ……伊藤雪山	39
ゼンマイ仕掛けのタイム・マシーン……高阪博一	43
俳句……夏子	53
なにしてる……大西亥一郎	55
―競演 第七回 だん― 男同士「小川悦子」・ダン、ダン、ダン「高阪博一」ほらぶき男爵の冒険「大西亥一郎」	56
総目次・編集室から	72

鴨川閑話

柴小路秀磨

三月の京都にはまだ冬が居候を続けている。午前中の日射しに誘われて、僕は今日も鴨川へ自転車走らせる。ガイドのボランティアもほとんど入らない冬の間は、夕刻のスポーツジム通いと、この鴨川散策が僕の仕事である。自宅から二条通を東へ十分弱で川原に着く。散歩やジョギングなら、近くに二条城や京都御所もあるのだが、神戸育ちの僕にとつてはこの川原の開放感が何よりうれしい。川辺の緑と町の人工美が溶け合つた鴨川の景観は正に、僕をして「京都に鴨川があつて良かった」と言わしめる風情がある。

川原の西側をさらに北に上り、丸太町橋を越えて次の荒神橋の西詰めまで行くと、そのこのこんもりとした木影に小さな祠があり、子供がこしらえたようなかわいのお地藏さんがちよこんと収まっている。その前にベンチが二つ並んでいて、そのうちの一つが僕の指定席になっている。近くには水場やトイレもあるので、気分の良い日は、そのベンチに荷物をまとめて一時間程川原をジョギングすることもある。夏場ともなると、午前中は日陰の多い東側の川原の方が過ごし安いのかも知れないが、ベンチからの眺めを考えると、やはり西側が良い。東山と大文字、そして比叡山ひえいざんが借景となるからだ。特にこの辺りから眺める比叡山は峰が鋭角を成して一つにまとまり、東山連峰を締めくくるように昂然とそびえ、正に秀峰と呼ぶにふさわしい姿である。

ただ、この指定席は予約制でないため、日によつては、近くにいたる野良猫やホームレスによつて占拠されていることもある。この付近にはいつも三、四匹の野良猫がたむろしており、時々僕のベンチの上に寝そべつて

いることがある。中でも僕が「シロ」とよんでいる毛並みの真つ白な猫は珍しく人なつっこい猫で、僕が近づいても全く動じないどころか、側に座ると膝の上まで上がってきてそのまま僕の股間に居座ってしまう。猫好きの僕にとつて、これは願つてもない癒やしとなるのである。ところが、ホームレスの場合はそうもいかない。仕方なく僕は隣のベンチに座ることになる。

僕と同様、この鴨川をこよなく愛する一人のホームレス。四十半ばぐらいで、彼ら特有の重ね着をし、大きな袋を二つ抱えたこの男は、二年程前から僕が鴨川を散歩中によく見かけるホームレスで、よく通った鼻筋に掛かった眼鏡の奥に時折覗く知的な眼差し、およそホームレスらしくらぬその端正な風貌にはどこか惹かれるものがあった。鴨川には橋の下に居を構えたホームレスが何人もいるが、彼はいつも大きな荷物を抱えて川原を南北に移動しているようで、時々、川原の石段にもたれて休んでいたり、食事をしているのに出くわす事もある。何時ぞやは独り静かに読書に勤しむ姿を見かけたことがあるが、その時の後ろ姿にはどこか哲学者といった趣さえ感じられた。そんなわけでお互い何度も顔を合せているわけだが、いざ隣のベンチに座り合わせたといつても話しかけるきっかけがつかめず、今だに言葉を交わしていない。お互い暇と自由をもてあましているという共通点はあるものの、どう声をかけてよいものやら、「どちらにお住まいですか?」「お仕事は?」は、どうも変だし「いいお天気ですね。」も、何か白々しいし、強いて言うなら「よくお会いしますね。」ぐらいかと、色々悩むが、結局まだ声をかけられずにいる。居を構えず、何か深い事情を秘めているのか、どこか高貴な香りを漂わせ、独り鴨川をさすらう孤高のホームレス。それにしても日中はともかく、この冬空を何処で堪え忍んでいるのか気にかかる。ある時、川原を出て町中へ向かつて歩く彼とすれ違つたことがあり、僕は自転車をＵターンさせそつと後をつけてみたが、その時は押小路通りをしばらく

西へ行き、柳馬場やなぎのばんばを南へ下つた辺りで彼を見失つてしまつた。あの大きな荷物と共に忽然と消えてしまつたのだ。その辺りは商業地区で、町屋に混じつて店舗ビルやマンションなどがひしめく所だが、彼は一体どこへ消え去つたのか、今もつて謎である。ホームレスとは言え、顔見知りともなると、しばらく見かけないと何故か安否が気遣われ、久し振りに姿を見かけるとホツとする。そんな間柄に僕達はなつてゐるのだ。あと何年彼はこの鴨川をさすらい続けるのであろうか……さて、このホームレスについては、今後進展があれば、またの機会にお話するとして、話をすすめよう。

一方、このベンチは、家に居着かれず、机に向かつて思索する習慣のない僕にとつて、夏の炎天下と厳冬期を除き、格好の書齋となつてゐる。僕は昔から散歩やジョギング中にアドレナリンのはたらきで色んな事が浮かび、アイディアもひらめくことが多々ある。そんな行動中に浮かんた事を、忘れないように、その意欲の萎えてしまわないうちにこのベンチで手持ちのノートに書きとめておくよう心がけてゐる。時には二、三枚の原稿を書き上げることもある。ただ、気分の高まりで一氣に書き上げた文というものは後で読み返すと、感動も色あせて、文脈も整わぬ拙文となつてゐるものだが、後に原稿を仕上げていく際にはいい材料となつてゐる。

さらに、今や家のベランダにおいてさえ喫煙を許されなくなつた僕にとつては、このベンチは自由にタバコを吸いながら思いをめぐらすことのできる最高の書齋でもあるとも言えよう。僕は決して世間のヘビースモーカーのように、生理的にタバコを求めているわけではない。年とともに本数も減り、今では一日に三、四本となつてゐる。そんな僕にとつて、喫煙は最早「くつろぎ」を具現化した一つのポーズであり、「憩いの儀式」と

化している。このベンチに腰を降ろし、ポケットの温もりが残るライターの肌触りを確かめながら火をつけ、比叡山の勇姿を眺めてゆつくりと煙をくゆらすという一連の行為そのものが至福である。従つて生理的に喫煙を要する連中が、喫煙所なる所に隔離されて、煙にまみれながらタバコを吸うといった行為はしたくない。



まともに相手の顔を見て話すことが出来ない、そんな自分の弱点をカムフラージュするために、時には少し不良っぽく格好をつけるためにもタバコが最良の小道具であった。

「ポーズ」や「儀式」としての喫煙はともかく、満足感を得た時に口にするタバコは実際に旨いと思う。ものをおいしく頂いて満腹感を得た時、納得のいく原稿を書き上げた時、登山において、一つの峠を登りつめた時……など、物事を達成した節目節目での一服は本当に旨いと思う。

くつろぎの時を演出するタバコも、名だたる文士達の手にかかること、実にカツコよく、様になるものである。本に埋もれた書齋で原稿用紙を前にタバコを手にした芥川龍之介、太宰治、川端康成、坂口安吾、松本清張といった面々。こうなると僕にとつての喫煙はある意味、知的なものへのあこがれであるのかも知れない。いずれにせよタバコは一つの「文化」である。その文化を「健康のために」というだけの理由でこの日本から絶やすことは絶対に許されないことだ……。

などと、今日も日溜まりのベンチに座ってあれこれとくだぬ事を考えながら、締め切りの迫ったアクトスの原稿のために単純な脳細胞を叱咤激励しつつペンを持つが、ペン先は遅々として進まず、ペンを持つ度になる。加えて、アクトス諸氏の目に叶うだけの文章を書かねばと、己の力量を越えた虚しい野望に憑かれ、ペンを持つ手はいよいよ重く、川面を眺めて悶々と過ごす日々が続く事になるが、やがて期限も切迫してくるとようやく、「自分の言葉で思いつくまま気楽に書くしかないのだ。」と、当然もつと早くに到達すべきはずの楽観的な境地に至る事が出来るのだ。つまり僕という人間は、事を成すにあたり、初めのうちは何かいいものを創ろうと、あらぬ野心を抱いては一応人並みに悩み、努力はするものの、期限が迫り余裕が無くなると、いとも簡単に己の限界を悟り、卑俗なるものにも楽々と甘んじることが出来るという便利な性格を持ち合わせているのである。

今、春の日射しの中で、僕のペン先は白いリンクの上を舞うエッチの如く、滑らかにすべり出した。



廻る命花

大西裕子

桜の木の下には死体が埋まっている

綺麗に咲く桜の花はとても神秘的で

時にこの世のものではないように思う

その美しさは他の生き物の命から得たものだ

遠い昔に誰かが言った

命は廻る

大地で育った命は やがて大地に還る

朽ちた命は地に還り そして次の命を咲かす糧となる

もしも私が朽ちたなら

私も大地に還れるだろうか

今度は大地に息づく命の糧となり

花となりたい

花は桜木 人は人

大西裕子

桜は凛と咲いて散る

その姿は潔く人で言うなら武士だと

遠い昔に誰かが言った

花は桜木 人は武士 柱は檜 魚は鯛 小袖はもみ

じ 花はみよしの

人は桜を一番という

武士は己を一番という



そうして共に潔く散る

それこそが武士のあるべき姿で

それこそが桜の美しさである

誰も言わないが誰もが言っていた

けれど桜は武士のように縛られない

勇名知名を求めずに誰に命ぜられることもなく

己に従い咲くのみで

桜は武士のように死を覚悟していない

潔く散ろうとは少しも考えることなく

ただ散るべきときに散るのみで

桜と武士は似ているようで似ていない

もしも桜が似ているならば

それはきつと

己に従い生きた人

終えるべくして生を終えた人

歴史に名を残さない

それでも確かに存在した

普通の人々なのだろう



奇跡

令月

ある日周りを見渡すと

世界は奇跡にあふれていた

人は不思議で奇跡の塊だ

誰かが言った

怪我をしても自然に治っていく

指を切つてもどこを切つても

裂けた肉は繋がり  
流れてしまった血は再び作られる

腐った物は臭い嗅いだだけで吐き気がする  
体に有害なものが入っても

咳で 涙で 汗で

無意識下で自分を守って治していく

それはどれだけ科学が進歩しようと

どれほど医術が進歩しようとも

決して作られた機械達にはできないこと

それが当たり前前にできる人は生き物は

何億分の一の確率で生まれることが出来た

奇跡の塊

そうして改めて見た世界は

そんな奇跡が当たり前前に歩いていた  
そうして気づかされる

自分は奇跡の世界に生きる

奇跡の塊なのだ

眩き集2



令月

へ子どもの眩き

クラスのこま回し大会で負けてしまった博人。ひろと不貞  
腐れて椅子に座っているとチャンピオンになった亮りょう  
が来て

「博人が応援してくれたから、俺優勝できてんで！  
ありがとうな」

カルタ取りであまり取れなかった奈々なな。枚数を数

える時に取れなかつたのが悔しいのか泣きだした。  
そんな奈々の様子を見て、正面にいた琴音ことねが

「奈々ちゃん、琴音の一枚あげる」

「琴ちゃんいいの？」（教師）

「うん！だつて奈々ちゃん泣いてるの嫌やもん」

幼稚園で豚汁パーティーを行った。園で作った大根や人参を子ども達が収穫して、職員が豚汁を作り、遊戯室で全園児が輪になって温かい豚汁を食べた。

四歳児・恵　豚汁を食べて、お腹を押さえながら

「お腹がぼかぼかしてる。お腹のストープがついたみたい」

五歳児・勇喜　遊戯室を見渡しながら

「（みんなで輪になって豚汁を食べて）夢みたい」

四歳児・慧　豚汁を作った園長先生に

「園長先生、自分で作った豚汁おいしいですか？」

好きな遊びの時間に教師と話をしていた優菜

「先生、この前のお休みにお母さんとお買い物に行つたんですよ」

「そうなんだ。いいなあ、何を買つたの？」

「あのね、優菜はイチゴが好きなんです。だからイチゴを買つてほしかったんですけど、お母さんが『高だから駄目』つて言つたんです」

風が冷たい日の園庭で、四歳児全員で砂場の道具を洗っていた。

「先生、お水冷たい」

「そうだねえ。でも頑張つてピカピカにしよう！」

「うん、でも、手がシビシビする」

途中で教師がぬるま湯を用意して、それで手を温めた子ども達。道具洗いを再開するが、また手が冷たくなり…

「また手がシビシビする。もう一度、手のお風呂に行ってくるわ」

〈甥っ子の呟き〉

PCをしていた次男

「ね、りぼん”つてどう打つの？」

「……？」(母・私)

「すにこらみみ！」(長男)

「ありがとう」(次男)

「……？え？なんなん？“すに……”？」

「すにこらみみ！PCのひらがなでそう打つたら“りぼん”つて打てんねん」

「……ああ、よう覚えてるね」

「涉たちのために覚えたかなあかんねん」



松庵二丁目

小野村新

通勤経路が変わり、自家用車を利用し始めてから、川瀬は週一回くらいの割合で、道路沿いの書店に立ち寄る習慣がついた。駐車場を備えたこの種の書店には軽い読み物しかなかったが、幾種類もの週刊誌の中から興味をひく記事を探し出し、その箇所だけを流し読むことは、彼の好奇心を大いに満足させてくれた。

ある春の日の午後、いつもの書店でおもしろそうな文庫本を物色していた川瀬は、『神田川』というタイトルの本を手を取った。そのタイトルから、東京の匂いをかいたからである。

川瀬は大学の四年間を東京で過ごした。山深い田舎で育った彼にとって、東京は憧れの土地であった。東京では何でもできる、と川瀬は考えた。街を歩いている女の子はすべて自分のものになりそうな

気がしたし、林立するビルディングの谷間には、安易にできる金もうけの方法がありそうな気がした。そんな気持ちを抱いて住み着いた東京ではあったが、川瀬にとつて東京は大き過ぎた。急に大都会の一隅に身を置いた川瀬にとつて、東京の喧噪は臆病な性質を助長する役目を果たしただけであった。女の子も金もうけも幻想だったことに気づくのにそう時間はかからなかった。

四年間で愛想をつかした東京ではあったが、やはり懐かしかった。何かの折、東京の地名を目にした耳にした時、懐かしさで胸が締めつけられることがある。俺は大学を卒業したというよりも東京を卒業したのだと、川瀬は考えるのだった。

『神田川』は、A新聞に連載されたコラムをまとめて一冊の文庫本にしたもので、神田川をさか上り、その流域にある地点にまつわるエピソードを五十紹介している。ひとつひとつの記事ごとに、みごとに挿絵が掲載されていた。御茶の水の聖橋から見

た風景や、駿河台の坂道や、芭蕉庵あたりの胸突坂などが巧みに描かれていた。神楽坂などは一見してそれと分かるほどの技量である。写真で見るともむしろ生々しい郷愁を誘う。モノクロで描かれた方が趣があつていいものだな、などと考えながらページを繰っていた川瀬の目が、一こまの挿絵にくぎづけになつた。

うっそうとした森、その森の下には交番の灯火だけが明るい光を放っている。神社の鳥居らしきものも見える。森の中から、他の樹木の三倍もの丈があらうかと思われるほど背の高いケヤキの木がそびえ立っている。ケヤキの枝は高くなるにつれて細く、数を増し、まるで稲荷神社の神霊が乗り移つたかのように、無数の指を大きく開いて、のけぞるように空を搔いている。何の変哲もない夜の風景スケッチに、ある種の懐かしさを伴つた戦慄が走り、川瀬は思わず唾をのみこんだ。

その挿絵の下には、「高井戸松庵派出所」とあつ

た。まぎれもない、川瀬が二十年前、大学三年の秋から卒業までの一年半を過ごした場所である。絵に描かれている交番から二百メートルほど北の方向に川瀬は下宿していた。黒い板張りの一戸建ての粗末な造りの家で、階下は物置になつていた。この下宿を借りた時のことを、川瀬は鮮明に思い出した。

不動産屋の主人に案内され、粗末な木作りのドアを開けると、一平方メートル程度の狭い玄関があつた。はき古した靴が乱雑に並べられ、隅にスキの板が裸のまま立てかけてある。上がり口の横手のドアがトイレらしい。狭くて急な階段を上りきつた所に、申し訳程度の台所がある。古いゴムのガス・ホースに、黒く焦げついた焔炉。焔炉の横に、使い済みのマッチ棒が数本散らばっている。台所に隣接して八畳の間がある。部屋には物が散乱していた。

「ひどいでしょう。夜逃げしたんですよ」

不動産屋の主人は部屋の中央に残された布団袋を指さし、むつとした表情をあらわにした。

「そうですか。それで入り口にいろいろな物が……」

川瀬は言葉に詰まった。

「五ヶ月や六ヶ月の家賃が払えないなんてねえ。電気代やガス代もためこんじやつて……。車のセールスマンだつたらしいのですがね」

主人は部屋の中の物を物色し始めた。布団袋の中から書籍の類が顔を出している。

「カメラの本がたくさんありますね。この本は隣のご主人にあげてください。カメラが趣味らしくですね」

隣も川瀬と同じ大家から家を借りていた。門構えのしつかりした大きな邸宅であった。川瀬の借りた一戸建ては、この邸宅の車庫兼物置として建てられたものに違いない。

「さすがに生活必需品だけは持って行つてますね。本、本、本か……」

不動産屋の主人は、少々呆れたような表情で言った。

「ところで、こんなところでもいいですか？」

ハンカチをカッターシャツの胸ポケットから取り出し、額の汗を拭きながら主人は訊いた。

「いいですよ。気に入りましたから」

川瀬は微笑みながら応諾した。ひとりつきりになりたくて学生下宿を出ようと決心した彼にとつて、ここは思惑どおりの下宿であった。

「明日中に部屋をきれいに掃除しておきますから。明後日以降でしたら、いつでも入ってください。この布団袋は置いておきましょう。欲しい本があれば、あなたがもらってください。他は隣の主人と分けるなりゴミとして廃品回収に出すなり、自由にしてください。古本屋に売つても大した金にはなりませんからねえ。お手数をおかけしますが、よろしく」

不動産屋の主人は、布団袋を軽く足で蹴った。「大家が国分寺じゃねえ。離れ過ぎですよ、全く。」

それじゃ、戻りましょうか」

不動産屋まで戻り、川瀬は五万円の敷金を支払い、賃貸契約を交わした。

三日後、川瀬はこの下宿人となった。布団袋は川瀬の力ではびくともしないほどの重さであった。袋の中から本を取り出し、それらの本を選別した。古本屋に売る本、隣の主人にあげる本、廃品として出す本……。

純文学の単行本の類から大衆娯楽小説の雑誌まで文学関係の本を中心として、思想書、歴史書、趣味の本など、すべて合わせると七百冊や八百冊もあろうか。驚いたことに、布団袋の奥から一冊の分厚いアルバムと数冊の日記帳までが現れた。川瀬は路傍の人の秘密に接するような、少々興奮した心持ちでアルバムを繰ってみた。

夜逃げしたという男は彫りの深い顔立ちで、ハンサムな部類に入るといつてよかった。彼の甘い微笑がアルバムの随所に見られる。撮影所で撮ったので

あろうか、人気女優AやTとのスナップ写真もあつた。恋人であろう、丸顔で小柄な女性と二人で写つた写真が数多くあつた。

不謹慎だとは思いつながら、川瀬は日記にも目を通してみた。逐電の真相をつきとめたいと思ひ、最近の日付の箇所をつぶさに読んだが、そのことに触れた記述は見あたらなかつた。日記帳の最後のページに数枚の名刺が挟まれていた。それには、「日本自動車販売株式会社 高野友雄」とあつた。

高野の逐電は、不動産屋が言つたように経済的に不如意だつたことも原因のようではあるが、それが最大の理由とは思えなかつた。アルバムや日記帳、名刺までも残したままで逃げるには、せつば詰まつた抜き差しならない事情があつたに違いない。（高野はなぜ逃げたのか、そして今どこに居るのか？）

川瀬は高野友雄の逐電の理由についてさまざまな想像を巡らせた。眠れぬ夜などは、高野の逐電



ストーリーを創作しながら眠りについた。それはずいぶん勝手なストーリーであった。どういうわけかのストーリーには、必ずあのアルバムの中の丸顔の女性が登場したものであった。ともかくこれは、東京という大都会で平凡な生活しか送ることのできなかつた川瀬が初めて遭遇した、刺激的でミステリアスな事件であった。

この下宿に住み始めた頃から、川瀬は東京にそのまま残るか故郷の福井に帰るかを真剣に考え始めた。この結論は、四年に進級する頃には、故郷の福井で就職する方に傾いていた。夏休みに福井市役所を受験した川瀬は、九月に内定通知を受け取った。

卒業論文も清書を残すのみとなった晩秋のある日、来年の二月いっぱい下宿を出ることを告げるために、川瀬は西荻窪駅前の不動産屋に向かい

た。

いよいよこの地ともお別れかという感慨を抱きながら、駅前までの一キロ半の道のりを川瀬はゆつくりとした足どりで歩いた。この松庵のような住宅街に一軒の家を構えて住むことができるなら、東京での生活も悪くないな、などと考えるほど、川瀬は松庵の風景が好きであった。

何代も前からこの地に住みついている人々の堅実な生活ぶりが住居のたたずまいに表れていた。特別に宏壮な屋敷は見当たらずなかつたが、どの家もそれぞれに適度な広さの庭を備えていた。それらの住宅の堀越しに見える植え込みの奥には、幸せな家族が平安に暮らす様子が手に取るように想像できた。このようにしつくりと落ちついた雰囲気

の住宅街がこの東京の一画にあることが、川瀬には不思議な気がした。  
雑居ビルの一階にある不動産屋の一室は、西日を浴びてむつとした暖気が鼻をついた。入り口横の

机で事務を執っていた黒縁眼鏡の若い女性事務員が「社長さん」と呼ぶと、奥のソファで煙草をふかしていた主人が腰を浮かせ、(やあやあ、ようこそ)といった笑顔で川瀬を迎えた。

「松庵二丁目の藤田さんの隣を借りている川瀬です」

主人は川瀬が誰であるかを思いだしたらしい。大きくうなずきながら、川瀬にソファをすすめた。

川瀬が来意を告げると、

「残念ですねえ。あなたのようなまじめな学生さんなら、ずつと居てもらつてもよろしかつたのに」と言つておきながら、次のようにも言つた。

「あの建物も老朽化していますから、ちよつとしゃれた感じのアパートを建てるように大家に勧めているんですよ。裏の空地を利用すれば、奥行きのあるけつこうりつばなアパート建ちますからね。ところで、東京での四年間はいかがでしたか。誰かいい女でもできたんじゃないですか？」 伺う目つきに

なつた主人に、川瀬は気圧された。

「はあ……」

返答に窮している川瀬に向かつて、主人は煙草に火をつけようとして持ち上げたライターをテーブルに戻し、これだけは言つておかなければという目つきになつた。

「そうそう、あなたの前に住んでいたあの男の人、高野さん。自殺したそうなんですよ」

「えつ！ 本当ですか」

不意をつかれた川瀬は、思わず驚きの声を上げた。

「あれからもう半年になりますかねえ。高野さんの母親が国分寺の大家を訪ねて、おわびかたがたいいろいろと話していったそうですよ。なんでも、息子さんは、大の映画好きで、シナリオライターを目指して勉強していたそうですがね。シナリオが認められはじめた頃、会社まで辞めて一途に頑張つたようですよ。ああいった世界は水物勝負みたいなどこ

ろもあるんでしようか、どうもうまくいかなかったらしい。突然栃木の実家に帰り、その翌朝納屋で首をつつたというわけですよ。二十九歳ですよ…。もったいない」

喋り終えた主人は、左手の指に挟んだままになつていた煙草に火をつけ、大きく吸い込んだ。

川瀬の目がくぎづけになつた挿絵の記事は、「ナタを追え」というタイトルであつた。サブタイトルとして、「交番調査殺人事件の謎」とある。昭和四十年に松庵派出所の若い巡査が殺害された。凶器はナタで、側頭部から後頭部にかけてを一撃された。この若い巡査は、血を流しながら犯人を追跡したが、あきらめ、フラフラする足どりで交番までとつて返し、もう一人の先輩巡査の名を呼び、こと切れた、という。現場近くで発見された血のついたナタを物的証拠として、地道で忍耐強い捜査が続けられたが、結局は、昭和五十六年七月二十七日

に時効を迎えてしまふ。この事件は当時NHKで、ドキュメンタリー番組として放映されたらしい。事件の発生した昭和四十一年といえ、川瀬はまだ高校生で、東京へは出て来ていなかった。川瀬が松庵二丁目に下宿した年の五年前ということになる。こんな物騒な事件があつた地で起こつたことを全く知らずに暮らしていたことが、とても不思議に思われた。

川瀬は、この交番を隔てて道の向こう側にある自動販売機まで、深夜よく煙草を買いに行つた。交番の背後にそびえる稲荷神社の黒い森が、彼は苦手であつた。できるだけ森を見ないように通り過ぎた。この神社の森だけは、松庵の住宅街の中で、異質の雰囲気をかもし出していた。森に包まれるようにして存在する小さな木造の交番には、深夜だというのにいつもこうこうと灯が輝いていた。

川瀬は、かつて自分が住んだ地である松庵にまつわる二つの死について考えてみた。松庵という地

は、死のイメージとはまるで反対のものであったのに、そこに存在した二つの死。そして、二十歳の頃、なぜ自分はあるなにも東京に憧れたのか？

書店を出ると、暮れなずむ春の空に残った夕日  
がまぶしかった。目を細めると、松庵二丁目の閑静  
な住宅街が川瀬のまぶたに浮かび上がった。その  
懐かしい映像は、際やかに色あいを深めながら、川  
瀬に迫ってきた。



# 十号までのあゆみ

2008年(平成20年) 9月28日(日)

## 設立集会

サンピア明石 午後2時から5時

出席者 大西・瓜生・小川・柴田・今井・濱田の6名

〔メンバーは上記6名に佐藤(俊)・佐藤(由)・土谷を加え9名〕

※懇親会を膳家でもつ〔大西・瓜生・佐藤(俊)・柴田・今井・濱田〕

私(大西)が退職後、文藝グループを立ち上げようと決めたのはこの年の初めである。それまで短歌の会と文芸のグループに属してはいたが、なにかと動きにくい。人間関係のやりにくさもあつて、辞めた。といつて、そういった場がないと、なかなか一人で書き続けるのは難しい。それで思い切つて組織を作ることにした。

問題は大きく三つある。まず小説や童話、随筆などは、作品にある程度の量があるので、短歌などと違ってコピーしてもちより、合評(話し合い、相互に批評)するという形がとりにくい。数人のグループとしてもコピーは大変だろうし、回覧というのは時間がかかりすぎる。

冊子化するといいが、文字ばかりの50ページほどのものでも業者に頼むと高くつく。字数にもよるが打ち込んでもらうと1ページ1000円くらいになるらしい。自分たちでワープロ打ちして印刷してもらつても2、3万円にはなる。もちろん絵や写真は論外である。おまけに会費はせいぜい月に1000円が限度だから、それでは年に1度くらいしか出せない。

◆総目次は最後尾にあげてある。

◆第4号に『3号雑誌とぼく』『1』ものかきになつたわけ』を掲載させていたのだが、これはその続編でもある。

が、この問題は時間が解決してくれていた。ICT（インフォメーション・アンド・コミュニケーション・テクノロジー）の進歩である。つまりワープロとインターネットだ。後者は2000年くらいから普及しだした。私は1980年代からパソコンを使用していたこともあり、自宅にはパソコンもネットもプリンタも揃っているし、ほぼ自在に使いこなせる。また背をステーパーで綴じた簡易製本のものなら数通十ページものを何種類か持えてもいる。また執筆する人もワープロを使う方が過半だし、ネットでの原稿のやりとりも普通になってきている。もちろん手書きという人もいるだろうが、少なければ私が打ち、多少増えても分担すれば大きな負担にはならない。

この形をとれば、安く、活字形態の冊子が、何度か出せる。それを核にすればグループの活動も活発になるだろう。また数十部から100部程度ならば、編集作業はともかく、2、3日で作成できる。つまり数名から十数名程度の仲間以外にも配布して、「読んでもらうことが出来る」のだ。この点については、現在は50部を作成している。会員には2部配付しているが、これは1部は例会などで使用したり、保存したりして、もう1部は同居の家族以外の方に渡してもらいたいからである。私は講演などで紹介したり、文筆関係の方などには配付したりして、できる限りばらまく事を心がけている。文藝作品は「読んでいただくかねば意味が無い」からだ。普通、たいてい自宅で増刷する羽目になる。うれしいがチト邪魔くさくもある。

なお、本号から、表紙を横書きにしてレイアウトを変更した。「内容が面白い」というのが第一だが、「手に取つてみたい」と、表紙や内容面の見栄えも考えている。良い案があれば教えていただきたい。

二番目の問題は参加者だ。

名前だけなら肉親を動員というも手だが、「書く気がない」のに誘うわけにはいかない。で、まず友人・知人である。国語の教員だった人、現役の人、また書くことが趣味な人、こういった会に興味のありそうな人などに声をかけることにした。また幸い、僕は明石市内のコミセンでおこなわれる（他市町では公民館）市民講座とか高齢者大学、幼小中学校での保護者向け講演会などの講師に年10回程度出かける。ここでもPRできる。こうして設立集会に9名が集まっていた。もっとも佐藤（俊）・今井のお二人は支援会員である。1号、2号が出ると、神戸新聞やミニコミ誌に取り上げていただいて、新たに会員が増えていった。もちろん会員の出入りは続くので、常に宣伝はしないといけない。組織が沈滞してしまふ。といつてドンドン書く人が増えると、アクトス誌におさまりきれなくなる。この形態だと適正は15、20名であろう。今読んでいただいているのは8ポイントだが、本文で使っている9ポイントの活字ならば、4000字詰め原稿用紙で100、150枚が限度である。だから現在の16名というのは適正規模なのだが、書くという作業には波がある。また入会され

ているが休眠状態の方もある。勿論例会の参加も固定者以外に、新しい人が顔を見せてくれるとありがたい。何につけても組織は常にリフレッシュして、互いに刺激し合い、前に進まないといけない。それには、僕が「常にできる限り新しい方を」とまず意識しないといけない。(と書いてきて、「ふむ：私自身が書き続けて、生き生きして、心は成長し続けたいのだめだなあ」と思う。)

この点についても会員諸氏の協力が是非とも必要で、そのためには、会そのものが魅力あるものでなければならぬ。三番目は会場と経費である。

数名から10名程度が集まる事の可能な場所を探さねばならない。次の第1回例会の記事に書いたが、調べた結果、サンピアに落ち着いた。但し、この会館は本年3月末で閉館される。1年間は猶予があるが機器の更新修理などは行われないので、4月からは市立衣川コミセンと言う事になった。

さて、経費である。会費月額1000円の範囲内で、冊子を年間4回出すことが中心になる。

前述したが、私は元々パソコンが趣味である。仕事で使う必要性もあり実益もかねて、ネットもハードディスクも、もちろん最早古くなった3.5インチフロッピーディスクもない時代、1980年代からのユーザーである。自宅にはパソコンや必要なソフトはある。プリンターも二台あり中綴じステープラーやカッターもある。とりあえずはそれらの機器を使用できる。ランニングコストを考えると1回50冊につき送料などを含めて25000円かかる。これなら会場費・増刷代などを考慮しても継続可能である。

こうして走り出したわけである。会員の若干の出入りがあり、そろそろ対応を考えねばならない問題もあるもの、なんとか継続できているのはありがたい事だと感謝している。

### 第1回例会

2009年1月10日(土)サンピア明石

サンピア明石というのは、兵庫県学校厚生会会の「貸会議室・ギャラリー・喫茶」、各種会議、講演会、パーティー、宴会場として建てられた物である。施設利用に際して教員や退職教員は割引制度がある。JR西日本の明石駅から南へ8分くらいか。この南には明石市役所がある。



会を立ち上げる時、駅に近いアスパ、ラポス、明石公園内の会議室、明石公園北にある図書館内の施設などと、西明石駅近辺の施設を検討したが、1年間通して土曜の午後を確保できる場所となると見当たらなかつた。因みに第4回までは、開始が18時で終了が20時となっていた。さて、第1回だが、大西・瓜生・柴田・小川・土谷の5名である。病气入院の会員にお見舞いを送る事を決めている。この後8時半から10時過ぎまで膳家で新年会。

**第2回例会** 2009年2月14日(土)サンピア明石 18時

出席は大西・瓜生・柴田・小川の4名。見学者が1名来られる。  
※ミニコミ明石 1月20日・あいあいAI 1月14日 とアクトスの活動が掲載される。大西隆史(215)・高島成子(226)さんが入会して会員は11名となる。

**第3回例会** 2009年3月14日(土)サンピア明石 18時

出席は大西・瓜生・柴田の3名。  
4月の次回からは、夜でなく、午後3時からと決める。但し、会館の都合で2階C会議室は、4月と来年1月の、ふた月のみ、夜しかとれない。またアクトスを年3回(4/8/12月)発行と決める。

**第4回例会** 2009年4月11日(土)サンピア明石 18時 (15時からとしたがこの日は施設の都合で駄目)

出席は大西・瓜生・小川・柴田の4名。  
高阪博一さん(播磨町)が入会。5月より参加。

**第5回例会** 2009年5月9日(土)サンピア明石 15時

出席は大西・瓜生・柏木の3名。  
柏木由美子(明石市)・血谷文雄(福山市)・大西裕子(神戸市)さんの3名が新入会。会員数16名となる。今回から15時開会。

**第6回例会** 2009年6月13日(土)サンピア明石 15時

出席は大西・瓜生・高阪・柴田・大西(裕)の6名。

終了後、王将で会食「大西・瓜生・高阪・大西(裕)」

**第7回例会** 2009年7月11日(土)サンピア明石 15時

出席は大西・瓜生・高阪・柏木・大西(裕)の5名。

松田政雄さん(播磨町)新入会。今井由利子さん逝去。

◆以下主な内容のみ記載していく。

①神戸新聞明石版にアクトス第3号の記事掲載。ミニコミあかし8/20号 インフオーメーションに記事。

②アクトス4号より、競演(統一タイトルによる創作)開始。「あつい夏」

③11/7(土)京都散策 大西・瓜生・高阪・小川・柏木・柴田・小川(小川さんのご主人)の7名参加。10時半集合→京都駅ビル→御所→三年坂 →坂本龍馬伝の博物館→高台院→京都駅解散4時。

④アクトス第5号より年4回(2月・5月・8月・11月)刊行開始。

⑤競演テーマ「ほし」

⑥**第13回例会** 2010年1月9日(土)サンピア明石 18時

例会は30分ほどで終わり、はたごやで新年会。

大西・大西(妻)・瓜生・高阪・小川・小川(ご主人)・大西(裕)の7名。

⑦伊藤富實夫さん(稲美町)新入会。(5/8の第17回例会で紹介)

⑧**第19回例会** 7/10(土) アクトス7号配付。5時20分より明石駅南のみなと銀行屋上ビアガーデンで納涼会。大西・瓜生・高阪・小川・小川(ご主人)大西(裕)の6名。

⑨柏木由美子さん退会。

⑩**第25回例会** 2011年1月8日(土)サンピア明石 15時

出席は大西・瓜生・高阪・柴田・伊藤・大西(裕)の6名。

4月から、瓜生・高阪さんが副会長となり、司会・瓜生、会計・高阪が担当し、規



約の整備も開始。会場はサンピアが閉館のため、明石市立衣川コミセンになる予定。

5時からはたごやで新年会。

小川・小川(ご主人)・大西(妻)が加わり9名。

⑪ 2/15 塩見伸介さん(小野市)が新入会。現在会員数 16名。

⑫ 第28回例会 平成23年(2011年)4月9日(土)衣川コミュニティセンター 15時〜 今回より会場が明石市立衣

川コミュニティセンター(衣川コミセン)に変更になった。

### 例会報告

いつの間にか、例会報告はHPの掲示板で、高阪さんがして下さるということになった。

「すみません、お願いします」「ありがとうございます」で終わっている。ネットの接続環境のない方には申し訳ないと思いつつ、この形を取らせて頂く。もし同僚や、子どもさんなど気軽に声かけが出来る方があれば、覗いてみて欲しい。検索の窓に「文芸集団」と「アクトス」の文字を一文字あけて入れて、エンターキーを押すと、アクトスのホームページになる。「アクトス」だけだと、葉やスポーツクラブが引つかかってくる。





水仙句と故郷

松田政雄

わたしの故郷は、「阿波・徳島」である。夏のお盆の頃には、「阿波踊り」が県内の各地でにぎやかに開催されている。わたしも播磨町に四国から出て来るまでは、阿波踊りに参加できることを楽しみにしていたものである。

そんな故郷に帰省するのは、両親が健在の頃は、お盆、お正月、そして、春の「水仙・梅・桜」咲くお彼岸の頃の年三回であつた。妻と子ども3人を連れて親の喜ぶ顔を見たさに必ず帰つたものである。

現在は妻と二人で、3月に明石で取れたイカナゴの「くぎ煮」を携えて帰る。生家のほか、徳島県内住まいの3人の兄姉の宅を訪問し、無事を喜び合っている。

この句は、大西亥一郎先生より「何か作品を」とのお勧めが再三あつたので、勇気を出して書いてみたものである。思ひ出のいっばい詰まつた故郷への想いと現在の生活を重ねて詠んでみた。

俳句と川柳の区別も付かない新参の初めての句である。もとより理科系なので、随分手こずつた。いろいろとご教示いただけるとありがたい。

水仙句

松田  
政雄

淡路島 水仙咲きて 人集う

水仙が かたまり咲きて 春を呼ぶ

紅梅と 白きスイセン 咲き競う

水仙の ふるさとの丘 恋いしかり

水仙の 花咲くころに 故郷へ



ウグイスに 梅と水仙 声そして

鼻歌に ラツパ水仙 伴奏す

水仙の 香りただよう 朝の道

水仙と スミレが庭で 恋してる



Typhoon 127号

明達 光輝

早由利は、車のアクセルを一杯に踏み込んだ。  
6気筒、3000ccの天然ガスエンジンが、唸り  
声を上げる。

7時に帰宅する予定だったが、少しずれ込むか  
もしれない。まあ、学校が終わっても、2077号棟  
のマンションには、学童保育所もあるから、安心で  
はある。

300号棟あたりの中心街までは、小学4年生  
には遠い。章は電動カートはまだ使えないし、自転  
車でも少し遠すぎる。悪ガキに誘われても出かけ  
はしないだろう。

フロントパネルのデジタル時計は6時20分を示  
している。たぶん、50分にはマンションに到着する。  
(電話しておかなくちゃ…)

風が強いので自重4トンの車は悲鳴を上げそう

だ。

早由利はハンドルについた、ボタンを押す。

「はい、甲山南学童保育所」

「あ、いつもお世話になっております。高橋でござい  
ます」

「ああ、高橋さん」

「どうやら電話の相手は、喜寿を迎えたとか言う  
村田先生らしい。」

「すみません。章は、こどもは行っておりますかし  
ら？」

「ああ、章くんなら、3時過ぎにきて、1時間ほどい  
て、三島君とか言う友達と帰りましたよ」

「あ、そうですか」

早由利の心を小さな不安が横切った。

「何か、急用でも？」

「いえ、少し帰宅が遅れるもので」

「ああ、そうですか。それで…」

「いつもありがとうございます」早由利は、慌てて電

話を切ることにした。村田先生は話が長いのだ。

「買い物をお願いしますので、これで失礼します」

「あ、ああ」

「失礼します」

早由利は、一段とアクセルを踏み込んだ。

軽四輪の黄色い車体が、とうとう悲鳴を上げた。  
した。

（無理しても7000ccの普通車にしとくべきだった……）

車体全体が交換効率75パーセントの太陽発電パネルで覆われ、燃料電池も積んでいる普通の軽自動車だ。

が、風のある日は、馬力が足りない。

早由利のしなやかな長い指が、ハンドルを強く握りしめた。

風は強い。台風127号は、中心気圧が890ヘクトパスカルだから、まあ、並の強さである。最大風速も70メートルに達しないだろう。今はまだ30

メートル程度である。

（電話、電話）

早由利は自宅の電話番号を押す。

数回呼び出し音が響いて、フツと切れた。

（携帯を持たせるべきだった）

2年前の離婚以来、章には淋しい思いをさせている。父親の賢治は、養育料の10万円だけは振り込んでくるが、会いに来たことはない。別の女性と結婚したが、安サラリーマンの彼には養育料が苦痛だろう。養育料が払えなければ刑務所行きだから、子どもが出来たとは聞いていない。

ほんの20年ほど前まで、離婚しても、子どもを女性に押しつけ、自分は新しく家庭を築いて子どもを作るといふ無責任なことが許されていたらしい。

自由な恋愛は人権だと言われていたが、つくった子どもの人権は無視されていて、生活保護に頼る母子家庭が多かった。

今はだめだ。子どもが義務教育の大学を終える  
22歳になるまで、養育料最低月額10万と決め  
られている。新しい子どもが出来て払えないとな  
ると、刑務所で強制労働に就かせる。賃金のうち10  
万は、元の子どもに払われる。二人いれば20万  
だ。

聞いたところでは、昔は、新しい家庭と子どもが  
出来て、経済的に余裕がないと、前の子どもへの仕  
送りをしなくても合法的だったそうだ。

(無茶苦茶だったのね……)

早由利の軽自動車はマンシヨンの地下駐車場に  
近づく。重たい鋼鉄製のシャッターが開き、猛烈な  
風とともに車が滑り込むと、シャッターが閉まる。  
それから目の前のシャッターが開いて、漸く駐車場  
である。この二重ロックの入り口は、2077号棟に  
は12ヶ所あり、出口も12ヶ所ある。

エレベータで8階に上がる。

ロビーがあつて、中央通路に出る。左右に部屋の

入り口が並ぶ。

他の号棟には、地下から通路が延びている。この  
通路幅は12メートルあり、高さも5メートルあ  
る。車も利用できるし、動く歩道もついている。

早由利は、ロビーから右手に折れて、100メー  
トルほど進むと、2077号棟の204号室の電子  
ロックを外した。

2077号棟だけで、1200所帯が住む。

玄関から廊下が延び左右に部屋が2つ。トイレ、  
風呂、物置。奥に20畳のLDKと、4畳半の和室  
がある。

窓は小さい。外に向かつて、高さ1.5メートル、  
幅1メートルの窓が4枚あり、はめ殺しだ。上下左  
右にピアノ線が入った窓は、二重になっており、風  
速200メートルに耐えられる。硬質強化ガラス  
は、弾丸を通さない。

章は帰っていない。

時計は7時である。

町中はそのら中に監視カメラがあるし、風にも心配ないが、三島という友達と、ビルの外へ出ていたら心配である。



4時頃なら、風速は20メートル程度であっただろうから、出入り口は開いていたはずだ。

早由利は着替えもせず、家庭用端末を起こした。

「パソコン・オン」

ユビキタス社会は到来していた。それでもGPSでの章の位置確認は、携帯では十分操作できない。スタンバイしていた壁掛け70インチのテレビ兼パソコン画面は、ほんの5秒で立ち上がるが、いまの早由利にはそれを待つのも長い。

「家族・章・位置情報」

音声認識ソフトがたちまち、居住生活棟・産業

棟・食料棟の計5000棟、約10000万人が生活する東京ハイシテイを俯瞰する地図を画面に出した。

それは次の瞬間にズームインして、2000棟周辺に収束する。

だが、章の所在を示す、光の明滅は見られない。「外部周辺」

早由利の声が幾分高くなった。

ハードディスクやDVDは利用されていない。今から30年前の、2010年代に、メモリーにとつて代わられている。現在では家庭用のパソコンでさえ、100ペタの記憶容量を持つ。1メガのプロツピー1000枚分が1ギガであり、その1000倍が1テラである。その1000倍が1ペタである。ちなみに、2005年ぐらいの時代では、パソコンのハードディスクは数十ギガというところだ。

薄い赤色が、旧東京区域に1つ明滅し始めた。

2077号棟からなら、12、3キロと言うところだ。薄い赤色なので地下部分である。

早由利は、軽く息を吐くと、警察直通の赤いボタンに手を伸ばした。

2000年前後から急速に進み始めた地球温暖化は、2040年には、平均気温を5度上昇させていた。

先進諸国は省エネルギーに努めたものの、ブリックス・BRICs(ブラジル・ロシア・インド・中国)の爆発的経済成長は、地球人口を120億に増加させた。同時にアフリカ、南米、東南アジアと言った地域も急速に発展しつつあった。

地球温暖化は、砂漠化を加速し、海面の上昇による陸地の浸食を伴った。けれども、堤防建設や灌漑技術の進歩は、それを補った。農業の工業化、漁業の工業化は、大規模な室内農漁業を発達させた。エネルギーは核分裂から、核融合の利用に進

み、燃料電池や、自然エネルギーの利用も進んだ。

だが、誤算があった。海面温度が30度にも達する地域が、北緯40度から45度にまでに達し始めた。北緯45度というと北海道の宗谷岬であり、カナダのオタワ、モンゴル、フランス南部である。

南半球も同じ事で、アフリカオーストラリアは完全にその範囲に飲み込まれ、南アメリカもほとんどが入ってしまった。

南極北極の氷は溶け、永久凍土はなくなり、海面は7メートルも上昇した。ただ、そこまでは予測の範囲だった。

思わぬ事が起こった。異常気象が頻発したが、いわゆる暴風雨が、常態化し始めた。アメリカメキシコ湾のハリケーン、中部太平洋の台風、インド洋のサイクロンが、冬季のほんの一時期を除いて発生した。

いままでこういった熱帯性低気圧とは無関係なヨーロッパも、襲われ出した。

北西太平洋の台風は、2000年前後の9倍、年間200の発生数となり、日本へは、その3分の1近くが上陸した。

1月から3月を除くと、平均4日に一回は台風が本州のどこかに上陸。しかも、その勢力は2000年前後と比べると桁違いになった。

風速が15メートルを超える強風域は、半径800キロ以上が普通になり、中心気圧も890ヘクトパスカル辺りが一般的になった。風速は30メートルを超えると、木造住宅の全壊が始まる。70メートルというとき速250キロの風である。それがごく一般的になった。場合によると100メートルを超える。ビルを含め、建物は修復不可能な状態で倒壊する。もちろん列車や車も例外ではない。

政府は、風速200メートルに耐える、高さ10階建ての台形建築物を何百棟から何千棟単位の建設。それをさらに台形に配置して、人間の住環境・生産環境をすべて人工物の中に閉じこめるこ

とにした。これをコアと呼んだ。

日本は、先進工業国から滑り落ちようとしていたが、集団として与えられた目標に効率よく取り組む特技は残っていた。

東京ハイシティは、世界最大級のコアの一つである。

旧市街地は、100メートル級の風速で、ほとんど完全に破壊され尽くしてはいたが、台風の来ないときは、出かけることが出来た。郊外の山は森も木も、完全になぎ倒され、低い雑草だけがしぶとく生き残っていた。

世界各国との交通手段は、水深50メートルから発進する巨大な潜水艦であり、航空機は、成層圏飛行はしても、風の間を縫つての運行であった。

地上でも暴風雨が来ない間は、コア間の通行は自由であった。

自重4トン以上の車であれば、風速70メー

ル以下の場合使用が許可されている。

早由利の軽自動車などは、風が70メートルを超えると、吹き飛ばされる。出先で天候が急変した場合などは、タイヤが車体に引き込まれ、地中に固定杭を打ち出し、風をしのごう装置が付けてあった。

70メートルを超えると、無限軌道を持った自重40トン以上の車しか通行は許されなかった。

パトカーは、早由利を乗せて、旧東京街区へ進入していく。

台風127号は予測通り、最大風速が70メートルを超えない程度である。風は強くなっていたが、まだ50メートル程度であろう。雨もさほどではない。

地表には砕かれた建物の残骸が残っている。大きなコンクリート塊がほとんどである。小さなものは風で吹き飛ばされ、1時間に500ミリなどとい

う途方もない雨に洗い流されている。

パトカーには窓はない。強化されたカメラを通して周囲の状況を掴む。

「大深度地下鉄と高速道路が開通すれば、早いんだがねえ」

75歳になる警察官が、ゆつたりとした口調で言う。

東京ハイシティと、千葉タウン、横浜ビレッジ、遠くは、大阪なにわ村までを結ぶ、大深度地下鉄と高速道路の建設は、もう八割方完成していた。

平均寿命は女性が115歳、男性は102歳であり、定年は85歳になっている。警官から見れば、早由利など孫にあたる年齢である。

「ああ」警官が続けた。「二人とも無事だよ。檜原あたりの地下だな」

早由利は黙っている。章を見つけるまでは、安心できないし、あまり話す気になれない。

章と出かけた三島の母親も一緒だが、三島の子

はいわゆる非行児で、早由利には被害者意識がある。

髪の乱れた三島の母親も黙っている。

早由利と違って3人の子持ちだ。そしてこの時代の例に漏れず母子家庭である。離婚率はアメリカを遙か昔に追い越し、87パーセント。3人の子の、それぞれ違う父親からの養育費と、政府から支給される児童手当だけで月50万にもなる。

子どもを育てるための援助は、制度や施設が充実している。なにせ、出生率は0.77。日本の総人口は7500万人である。

手厚い子育て援助のおかげで、「子供を産み育てることが、人としての人生の楽しみ、充実である」という考え方が普及してきた。しかし、男性はいつの時代でも、子育てより夢を追うことに熱中する生き物だ。子育ての体制が整うほど、男性は家庭

を顧みなくなった。

(いいのよ、章は私だけの宝物……)

早由利は、ぼんやりとそう思った。

突然パトカーが揺れた。

慌てる早由利に警官がゆつたりと言った。

「台風が接近してきたかな」

早由利は、外部を映すモニターを見た。

少し風が出てきたようだった。

了

リーくと月

ゆきんこ

リーくんは今年5歳になる。

名前はりおん。みんなから、リーくんと呼ばれている。

ある日の夜、バーバの家で夕飯を済ませたりーくんは、見送りに出たバーバにおんぶをせがんだ。

今夜はお月さまが一段ときれい。まるでうさぎ

が、お餅をついているかのように見える。

「ほら、空

を見上げ

てごらん。

きれいよ」

「お月さまー」と、リーくんはつぶ。

「僕が走ったら、お月さまもついてくるかな？

ーバ走って」

「ついて来た、来た。わあい」

「リーくんが隠れたら、お月さまはどこに行った

かなって言うかな」

「そうだね、心配するかもね」



リーくんはお月さまが大好き

「ねえ、夜になるとお月さまは光るの？」

「えっ？ ああ、この前夕方見たお月さまと違う  
ね」

「夜になると、きらきらと輝いて見えるのよ」

「お月さまにさわってみたいな」

「さわれるといいね」

「そろそろ、お月さまにバイバイしようか。ママが待  
ってるから帰ろうよ」

「バイバイ」



好きな匂い

「ただいまあ」

いつものように元気に次女が帰ってきた。

「今夜のおかずはひよっとして？」

「カレーライスとサラダよ」

「ヤッター！ 私はいくつになっても、カレーが好きなんだ」

「いくつになってもって、まだ16歳じゃない」

つこみを入れて笑いあつた日を、まるできのうのことに思い出す。

次女は幼い頃から、カレーライスが大好物だった。食べるだけでなく、作ることに興味を持ち、いつの頃からか私に代わって台所にも立つようになった。人参を星型に型をぬいたり、玉ねぎが目にしみると言つて、水中めがねをしながら切つていた。カレーのいい香りが台所中に広がり、しあわせに包まれる気さえした。

「おいしくできたね」と家族で食べた日が懐かしい。

我が家の匂いといえは、カレーライスのあの香り。みんなが笑顔になれる匂い。

それを引き継いだかのように、孫もまたそれが好き。この前も台所にきて「リーくん、カレー大好き」とはしゃいでいた。好きなものは食いつきもよく、あつという間にたいらげてくれる。



水田竜子

匂いと言えば、子供の頃から夕立の後の土ぼこりの匂いが好きだった。からからに乾いた地面の上をザーッと雨が降り注ぐ。長い時間ではないので、軒下に雨宿りをしていると小雨になる。

そうすると立ち込めてくる、土ぼこりの匂いが。

雨でうるおった地面からなんともいえない匂い。

雨上がりは木々も色を深め、空気も澄んでいる。空を見上げると虹がかかっている。

近年はゲリラ豪雨という被害をもたらす雨が降って、昔のように悠長でないこともしばしばである。降りすぎず、大空にかかる虹を見上げていたあの頃が懐かしい。



我が小さき孫・子らへ 辞典を引くということ

2011・2記

向に舵をきつたようである。四つ上の兄も数学の専攻で、中学教師になった。

伊藤雪山

私は幼少の頃、いつしか、国語と云う教科が大の苦手になっていた。何故かわからない。家庭環境にもよるだろう。以来続いていて、とにかく理科の方

予め自分で分からない言葉を書き出して調べておくのである。そこらに兄姉がいるとすぐに尋ねていた。辞書を引く手間を省いて早く終わって遊びた

いのである。そこで大体「自分で辞書を引け」とたびたび言われた。学校から家に帰るや、遊びに行く友が待っていることが多かったし、とにかく辞書を引くのがめんどうくさかった。

ある言葉を使つて短文を作れというのも大の苦手、今から思えば要領がわからなかつた、ただそれだけのようと思う。後になつて国語の先生がその要領を教えてくれてさえしていれば少しはましになつていたかもしれないと恨んだ。また、理科、科学は人間の進歩に役立つ、比して国語など役に立つものかと、どこかそんな思いもあつて、あまり好きではなかつたのだ。それがいまこうして、老いを迎えてから、何か文章などを書くとう云う気持ちになつて自分の自分が不思議である。

「書くことは生きること」は確か柳田邦夫著書にあつた言葉である。その意味づけは様々。何でもいい、ただ自分が考えたこと、思ったこと、感じたこ

と、どこかへ行つた記録、毎日の記録、日記、俳句、短歌等等、ただ「書く」といつても内容も様々である。「文は人そのもの」「文は力なり」などなど次第に、国語力の大切なことが分かり始めた。それも、入社試験ならぬ昇進試験に直面したことがきっかけになつた。大抵の場合、文章を書かせたらその人の力があるかないかわかるといふ。企業の採用試験



には大抵、作文などを書かせることが多いとられた。「作文は人柄の試験」などとも言われた。文章の良し悪しは、書いた人間の自身で決まるということ、その人間が、どのように人生を生き、見つめ、考え、感じているか。それが勝負だということを厳し

く問われるのだといえよう。「いい文章を書けるようになるための王道はない。」「習うより慣れろ」と。そこで、書いたものがフィットするかどうかはさておいて、とにかく、読み手の心にスムーズに入りこめる文章であること、さらに、その上で読者を釘付けにするような文章をかくことを目指すことが肝要であると考ええる。

七十歳にもなり、様々な世のしがらみから解放たれて見ると、無性に書き置きたいことがあるような気がしてならない。ただの記録もいいのだがそれではつまらない。そのときどんなことを感じたかが大切な部分である。それを専門用語では「感情移入」というらしい。

そこで、まず、感性を大切にしたい。現役のときはひたすら目の前の仕事のことにはかり心がうばわれて、周りを見る余裕がなかった。今は違う。周りにたくさんの書く素材がある。自然の季節の移り変わりを感得する、様々な会合、電車の中、人の

集まりの中で人の所作、言葉遣いなどを通して人間観察をすっかり出来る心の余裕がある。知らず知らず感性をとぎすますことになるのである。それは過去にも似たような時代があったように思った。それは思春期だったような気がする。

表現力をどう鍛えるのかといえば、過去の文人は様々な工夫していた。

弘法大師は、文章を草する場合、常にカードもしくは携帯ノートを作成しておいて、それによって執筆することを薦めている。「文章は興に乗じて直ちに作れ」と。演歌の作詞家で名を上げた阿久悠も同じことをしている。

そうでない場合は、普通は「辞典」に頼ることになる。国語辞典、漢和辞典、類語用辞典、感情表現辞典、比喻表現辞典、カタカナ辞典などがあるがこれを駆使して、五感でキャッチし、感じたことをできるだけそれに近いところで文によって表現す

るのである。

自分が感じたこと、考えをどういうふうにかき表すかが文芸であろう。それにしても、一番大切なことはまず読む人にわかるように書くこと、文体の改革者である二葉亭四迷は口述のように書け、司馬遼太郎は文体にきまりはない、自分の思うように書くといっている。

すべての出発点は、観察力に裏打ちされた豊かな感性あつての話であることは間違いない。

今のところ、身近に親交の人から、貴方の文は読みやすいといつて頂くのは唯一励みとなり、「知らせるは楽」であるので続けている。勿論お世辞であることは重々承知のうえだが。

因みに幼少の頃の私の家族、家庭は六人兄弟姉妹でにぎやかな生活の時代があつたがそれもわずかな一期間でしかなく、兄姉は中学を卒業すると、山奥の田舎暮らし故、遠く離れた町の高校の

寮生活に入り自宅から離れて生活する、それも順送りで残された二人の妹だけで急に家族は静かになり寂しくなつた。今から思えば、けつして豊ではないがにぎやかで面白い時代であつた。家族つて、ほんのわずかな期間だつた。ホット一息したときには、ばらばらになつていた。でも、その分は、外で近所の子どもたち、同年齢・異年齢入り乱れて一日中、遊び呆けていたので救われていたようだつた。「呆ける」とは「放氣する」といい気を放つということである。暗くなるまで夢中になつて遊んだ。

四つ上の兄は二〇一〇年九月の秋の叙勲で双光瑞宝章を受章している。九年間近く地域の社会教育の指導に携わり貢献の功績が評価された。後に小学校の校長をして定年退職した。高校の校長した叔父は一足先、平成二年に藍綬褒章を受章している。親族としては名誉なことであつた。これは自分史の一コマの記録である。そしてエンディングノートの一部でもある。

文芸集団アクトス主宰のO氏から「自分史を書いてみたらどうですか」との言葉に触発されて書き綴ってみようかと思ひ始めたところである。

#### 新入会員

◆<sup>しお</sup><sup>み</sup><sup>しん</sup><sup>すけ</sup>塩見伸介さんが、2月15日に入会されました。小野市にお住まいです。事務的には23年度、4月からとなりますが、3月末締切の10号にも原稿をいただきました。

ペンネームは小野村新です。ご活躍を期待しています。



ゼンマイ仕掛けのタイム・マシーン

高阪博一

角を曲がった。外灯の点いている家の間に、ぼつんと暗い影のような所がある。そこまでもう少し、やつと小さな門の前に立つた。仕事で遅くなりがちだとはいえ、風の強い日は駅から歩くのが辛い。もう二十年も繰り返しているというのに。一寸前までは灯りが点いていた。それなのに……、やはり灯りの点いていない家に帰るのは淋しい。

門を開けて中に入り、郵便受けを開けた。

夕刊が入っている。それに数通の封書。暗くてはつきりしないが、販売促進のダイレクトメールの類い

だろう。それらを取り出し、数歩先のドアを開けて、家に入った。灯りを点けた。靴も脱がず立ったままで、新聞を小脇に抱え、「また、ごみが増える」と呟きながら封書を見た。何通かの中に、見覚えのある手書きの封書が一通入っていた。「また、十年経ったんやなあ」と誰に言うともなく、私は小さな声を出していた。

居間に入り、またスイッチを押した。ぱつと部屋の中が明るくなる。次はストープ、ポットと順番に続けて、コートを脱ぎ、そのままソファーに深々と腰を落とした。ふーと息を吐いて、ネクタイを緩め、手書きの封書を見た。ストープが徐々に赤さを増していく。内容は分かっている。案内状と返信用の葉書が二通入っている筈だ、私用とあのひと用の。

「返信用は一通でええよ」と言うと、あいつは「先のこととはどうなるか分からんよ。一人で来なくなるかも知れんやろ」と笑いながら言っていた。何処で

言われたのかはつきりしないが、単なる冗談と思つたことはよく覚えていいる。こんなことが私達に起こるとは思いもしなかつた。「いい勘してるよなあ」と自嘲気味な笑いが漏れた。

あいつとは高校三年間、同じクラスだった。何となく気があつたので、クラブ活動をしていても、あいつから草野球の誘いがあると、ついついクラブ活動をサボつたことがよくあつた。三年の後半になつても、それは続き、教師から、「お前ら、大学受験前に、そんなに余裕あるの？たいしたもんやなあ」と皮肉を言われものだった。それでも、運良く互いに地元の大学へ入学し、あつという間に四年間が過ぎ、卒業して別々の会社で働くようになっていた。

あいつは転勤を繰り返していても、どういう訳か、この時期には我々のところに帰っていて、万年幹事をしていいるのだつた。我々仲間内で、「会社に頼んで、十年目には元のところに返してもらおう約束が出来ている。だから、出世しないんや。あいつがいつ

もペイペイなのは、我々のせいや」と冗談とも本音ともつかぬ話を言い合っていた。

封書の頭を破つて中身を出した。案内状と葉書二通、予想通りだった。だが、予想通りにいかないことも多い。あいつは分かかっていない。いや、分かる筈はない。あのひとが出て行つて、まだ一ヶ月だ。

家に帰ると、あのひとは居なくなつていた。『私達つて、小さな時に遊んだゼンマイ仕掛けのオモチャみたいですよ。それも、すぐに壊れる。伸びてしまつたゼンマイつて、直せるでしょうか。考えてみます。結論が出たら連絡します。それまで一人にして下さい』と書かれた便箋が、机の上に置いてあつた。別に驚くこともなかつた。何となく気配で分かるものだ。このことは誰にも話していい。誰に話したところであろうものでもない。所詮は二人でどうするか決めるだけのことだ。

テーブルに置いてある老眼鏡をかけた。この頃は、これ無しには何も読めない。高校を卒業以来、

これで三回目になる。何気なく鏡を見て、やけに皺が気になることがあるし、頬が弛み気味だと感じるし、毛の具合も気になつて仕方がない。「前回はかけずに読めたよな」と自嘲気味に呟きながら、案内状を眺めた。

あいつは世話をやくわりに、文章には拘らない。多分、あの書き出しだと思つて見ると、案の定「さあ、みんな、タイム・マシーンにスイッチを入れよう」で始まる案内状だった。次に続く「三回目の」という箇所が、前の二回と違つていただけだ。「あいつだけやろうか、変れへんのは」私はふと短い言葉を口にしながら、「さて、いつどこでやるの?」と思つて、読み進んでいった。

日時は今から二カ月後の四月九日、土曜日の午後六時から、場所はエビス屋だった。「あそこはこの町の老舗。名前は古めかしい旅館みたいやけど、全くのホテルで、庭がいい。その頃は桜が綺麗かもしれんな。あの広い庭を歩きながら、夜桜やなあ。

互いにアラも隠れるか。待てよ、ひよつとして、桜が散つてるかも……」 答えが返ってくる筈のない正面をぼんやり眺めながら、私は低い声を出していた。

「どうする気なん、今回は」と頭の中に居るもう一人の私が質問してきた。「うーん、まだ分からんね」と声にならぬ呟きを返しながら、あのひとはどうするだろうと思つた。徐々にあのひとの姿が浮かんできた。肩まで切つた毛の先が内に緩やかなカーブを描き、多少栗色がかつた柔らかな髪が風にそよいでいる。紺のセイラー服に緑のネクタイ、はつきりと折り目の見える膝までのスカート、高校時分のあのひとの姿だつた。

一年生の時、同じ組になつた。別に、意識する間柄ではなかつた。学校の決まりで、兎に角、当初は全員がクラブ活動をしなければならぬことになつてゐた。私は全く運動が出来なかつたし、やるうとも思わなかつた。動くボールをあの細い棒で打て

る訳がないと思つてゐた。あんな高い網に、頭より大きなボールを入れられる筈もないとも思つてゐた。まして、襟を掴んで相手を投げるなど、もつてのほかだつた。躊躇なく、文化部系統、それも経験のない合唱部に決めた。合唱部は女の子が多いと誰かから聞いていた。経験のないことなど気にもしなかつた。可愛い女の子がいれば、それでよかつた。

初めてクラブに行った時、「やつぱり、女の子多いな。ところで……」と思ひながら、辺りを見回してゐた。七対三で女の子が圧倒的に多い。二年生と三年生とで三十人程度、それに一年生の希望者が十名だつた。上級生に可愛い人が多かつた。入部すると、みんなの前で、ド・レ・ミ・ファを歌つて、パートを決められるのだが、最初に歌う破目になつた。すると、どういう加減か、テノールに決まつてしまつた。

最後の十人目になつた。あのひとだつた。「なんや、同じ組みのやつやないか」と見てみると、すぐに

ピアノの音がして、低いのだが、透き通った声が響いてきた。「ええ声やな」と感心していると、「あなたはアルト」と即座に教師の言葉が耳に入った。「声のええ人は姿もええ。可愛いな。クラスで見ると違うやないか！」あのひとをじつと眺めながら、春の明るい陽の中でハミングするような弾んだ声を口の中で出していた。

初めての練習の日がやってきた。練習曲の楽譜はパート決めの時に貰っていた。そして、最初はド・レ・ミ・ファで歌うのだとの説明も、その時に聞いていた。音符の読めない私は、それを楽譜に書いて一応準備していた。「一年生が居るから、皆、聞いて。ソプラノは指揮台から見て左端、そこから横に、バリトン、テノール、アルトの順。さあ、並んで」と先生が言うので、言われるままに並んだ。横を見た。あのひとと丁度横を見ていたので、顔が合った。私の持っていた楽譜を見て、「それには音階、書かん方がええよ」とあのひとが低い小さな声を出した。何

となく、微かに笑っているような気がした。

ポットがシューという音とともに、白い蒸気を噴出し始めた。最近になって、やつと分かりだした、以外に音が大きく、蒸気も結構出ることを。ソファアから腰を上げて、コーヒーを入れようとポットに近づいていった。一寸前までは、豆から挽いて飲んでいった。今はインスタント。適当にスプーンで掬って、カップに入れ、お湯を注いだ。カップから細い湯気がゆっくり上がっている。私はふーと溜息をついて、カップを取り上げ、口に近づけていった。

時間の進む速度は早い。クラスでもクラブでもあのひとと顔を合わせてはいるものの、季節はどんどん過ぎて、あつと言う間に二年生になっていた。二年の組替えて、別のクラスになってしまったので、あのひとに会えるのはこの合唱部の練習の時だけだった。もうその頃には、楽譜にド・レ・ミ・ファを書く必要がなくなっていた。「歌えるようになったね」あのひとに言われると、堪らなく嬉しかった。

二年生の秋、合唱コンクールに出るということで、日曜日にも練習をすることがあった。今まで、コンクールのコの字も出たことがなかったのに、何を血迷ったのか部長が言い出し、先生までも我を忘れて、乗ってしまったのだ。部長が焚付けたと皆でぶつぶつ言い合っていた。身の程知らずなのは、この二人だけで、皆はよく分かっていたのだ。

私にはあの人に会えて好都合だったが、朝から昼過ぎまで、四、五時間も同じ曲ばかり練習していると、「もう、いいですよ！」という気分になるものだった。やつと終つて、やれやれと思っていると、「今から、フォーク・ダンスをします。コンクールに向けて、コミニケーションを図るため、全員参加して下さい」と突然、部長の明るい声があった。以前から放課後、何人かできていたようだが、どういう訳か、恥ずかしさが先に立ち、私は参加することがなかった。「早よう、帰ろうな」と疲れた膨れつ面で椅子に坐っていると、音楽が始まった。

「さあ、踊ろ」と目の前に手が差し出された。あのひとと目が合った。躊躇いがちに、腰を浮かして、あのひとの手を握った。今までに感じたことのない感触だった。柔らかいのだが、単なる柔らかさではない。ふつくらと綿菓子のように、びんと弾けて元に戻るような柔らかさ。ものであつて、ものでないような、それでいて、中には確かなものがあるような、そんな不思議な柔らかさ。「これが、女のひとの手というものなんや」と心の内で叫んでいた。

カップのコーヒーが多少冷めたようだ。粉を多めに入れたせいなのか、やけに苦い。『夜明けのコーヒー、一緒に飲もう』こんな歌、ナツメロにあつたよな」とつい声が漏れた。別段、夜明けに飲むコーヒーの相手が欲しい訳ではない。一人で気兼ねなく、味を楽しむのは好きな飲み方だ。だが、帰つて服も脱がないで、ぼつんと一人飲んでいる。それもインスタントを。それはやはり怪しい。

三年生でまたあのひとと同じクラスになつたが、

この一年はあつという間に過ぎていった。あのひとは東京の大学に進学し、無事四年で卒業したと何かの折に耳に入っていた。その後、あいつから、東京で就職して、こちらには帰ってこないことを聞いた。

「東京には格好のええやつ多いもんな、仕方ないなあ」そんな負け惜しみのような言葉を呟きながら、あの手の感触だけは懐の中で妙に蠢いていた。それが数年後、ふと町で見かけたのだ、あのひとを。

コーヒーは冷め切ってしまった。二杯目は飲む気にならない。部屋が暖まってきた。ストーブの温風が心地よい。落着いた気分になつてきた。背広の上着を脱いで傍らに置いた。内ポケットに入れている万年筆を取り出した。「さて、どうしたら……」と思ひながら、そのキャップのネジを回して外した。

あいつに電話を入れて、あのひとを見たとき告げた。「どうも、東京で何かあつたみたい。詳しいことは分からんけど……」との話だった。懐でどうにか静かに治まっていたあの感触が、一気に堰を切つてし

まったようだった。どうしようもなく、逢いたいと思つた。もう、二十五を過ぎている。多少の経験もある。あの時のように照れることもない。すぐに電話のダイヤルを回していた。すんなりとあのひとは承知して、エビス屋のバーで会うことになった。

「まだ、十年経つてないけど、二人だけの同窓会やね」何となくごちないあのひとの会話から始まった。私は薄い水割りを飲みながら、あの人の話を聞いていた。東京で就職し、優しく指導してくれる上司に恋をして、お定まりの不倫関係になつてしまつた。暫らくして相手は家庭を取り、会社でも噂が広まり、辛い気持を抱えたまま郷里に帰つてきたのだつた。

ロックを何杯か飲みながら、そんなことを一気にあの人は喋つた。「飲めるようになったんや。強いなあ。それにしても、久しぶりに会つたのに、ようそんなこと喋れるよな。俺つて、喋り易いだけなんやろうか？」と心の内で呟いていた。話を聞くだけの『い

い人』には、ここでありたくはなつた。あの感觸が私を急き立てていた。

「何で、思い出すんやろう。それに、結構はつきりと」万年筆を握りながら、返信用の葉書を見つめた。出席・欠席、どちらかを選ばなければならぬ。この一ヶ月間、あのひとは思わぬようにしていた。思ったところで、この二十数年が返ってくる訳ではない。「一人で出席したら、説明せなあかんし、それにもしあのひとが出席でもしたら……。まあ、修羅場にはならんと思うけど」もう一度返信用の葉書を見つめた。「さあ、踊ろ。フォーク・ダンスやないけど」あの



ひとが立ち上がり、ぎこちなく微笑みながら手を差し出した。何となく泣いているような気がした。私も立ち上がつて、その手をとつた。焦がれていた感觸とは違う何かが伝わってきた。酔いが回つていたのか、あの人の身体がぐらつと前のめりになり、私の身体がそれを受け止めた。

柔らかな身体の感觸が伝わってきた。あのフォーク・ダンスの時の感觸は、もう取り戻せぬものになつてしまつたと一瞬にして思つた。それは弾けるようなものではなく、熟れた果実に触れた指が、ぬるつと表皮を通して窪みを作るような感觸であつた。それからどれ程経つたのだろう、二人は部屋の中に入つた。あの人は私の身体の下で、密やかな呻き声を上げていた。

一年もしない内に一緒に暮らしていた。一回目の同窓会は二人で出席した。結婚のお披露目も兼ねて。出席者の誰もが意外なようだつた。あのひとが東京から帰つてきたのは、きつと何か訳があつた

からだど皆思つていた。出席者がそれとなく「なんで？なんで？」と聞いてくる。「一年生の時から好きやつてんで。秘めた恋、やつてんで」とその都度、適当に答えていた。あいつだけが「良かったなあ。慕いが叶つたんや」と言つてくれたのを覚えてる。

どうするか書きあぐねて、まだ返信用の葉書を眺めていた。二回目はどうだったかとふと頭をよぎつた。二人で出席はした。四十手前、男は会社での自分の将来が見え初めている時だ。重役が視界に入りつつある奴、諦めに入っている奴、いろいろだつた。女は夫より子供の将来に夢を託している人が多いようだった。あいつが「おまえら、子供まだやな。一寸淋しい？」と声をかけてきた。「二人でいる時間が増えて、ええよ」とどこか負け惜しみのように私は答えていた。

こうなつたのは子供が居ないためだけではない。いろいろなことが重なつた結果だ。明確な理由は分からない。一寸した亀裂が、風や雨によつて浸食さ

れ徐々に深くなり、表面だけではなく、内部までぼろぼろにしていつたのだらう。氣付いていれば、直せたかもかもしれない。一緒に暮らしているのに氣付かない。そして、氣付こうとしない。

子供がいない分、私は仕事に精を出した。休日会社に行くのはザラのことだった。「また、今日も行くの」と言つていたあのひとも徐々に言わなくなつていった。そして、日常も、「この髪のかたちどう？」「ええよ」「この服、どう？」「ええよ」とこんな遣り取りだけになつていった。氣が付くと、遅い夕食の時に聞こえるのは、テレビからの笑い声だけという状態になつてしまつていた。乾いた沈黙は耐えがたかつた。

遠い昔のことなのに、嬉しかったことはよく覚えてるものだ。あの手の柔らかさも、あの結ばれた時の身体の感触も、忘れられるものではない。だが、覚えているからといって、それが一緒に暮らす理由にはならない。甦るのは、皺一つない艶々の薄桃色

をしたあの当時の顔なのだ。くすんでかさかさなつたあのひとの今の顔ではない。乾涸びてしまったものは、決して元通りにはならない。多分、あのひとと同じように思っているかもしれないが……。「きつと、二人とも子供やつたんや、自分のことしか考えへん」誰に言うともなく、私の口から言葉が零れ落ちていた。

「欠席」にやつと丸を入れた。近況のコメント欄が目に入った。多少考えて、もう一度万年筆をサラサラと動かした。「脆い機械のようです。ゼンマイが壊れて、私のタイム・マシーンは動きません。修理もダメなようです」と書いた。「一寸、キザやけど」私は口の端に笑みを作つて、ふーと深い溜息をついた。もう一度、葉書を見て名前を書いた。「出席するやろうか……」テーブルの上にもう一枚、葉書が残っていた。あのひとの分だ。

サイド・テーブルの上にある小さな物入れの抽

斗を開けた。数日前にあの人から届いた封筒を取り出した。濃い緑色の文字で印刷された用紙が入っている。その用紙を開いた。既にあの人の署名と捺印がある。「そうや、こんな紙、たつた一枚なんや。男と女の関係なんて」誰にいうともなく私は声を出した。万年筆をまた握つた。あつという間に名前を書き、判を押した。「明日、葉書と一緒に送らな……」二つ並んだ葉書の横に、私はその用紙をそつと置いた。

了

(注)第八号に永井組若芽さんが『タイムマシーン』という短篇を書かれていた。読んでいて面白かったので、私も書いてみよう、そのモチーフを頂いたので、私も書いたら、例会でご批評頂ければ……と思つています。

俳句

夏子の恋シリーズ第VI

9号 夏の海Ⅱ……恋終わるのつづき

秋入日……恋の残り火

夏  
子

君が好きだったジャズ聴くカフェの窓

秋愁い 君の仕草をふと思う



いつも隣で笑ってた君がいない 秋

金木犀ほつほつ恋の残り火かと

草紅葉 君への想い募らせて

君が来ないか今日も待つてる 秋入日

つづく

なにしている？

大西玄一郎

授業中

ちよつと 銀河に

夢飛行

あたまたに こつんと

流れ星

「ねるなー」「美人

千ヨーク ミニサイル



◆近隣地域で、浄土宗のお寺を、お探しの方のお役に立ちたいと思います。

浄土宗 永金山 じょうさん じ 常纂寺

〒651-2133 神戸市西区枝吉4-40

■ TEL : 078-928-6622

■ FAX : 078-928-6858

◆メール [hayato13@yc4.so-net.ne.jp](mailto:hayato13@yc4.so-net.ne.jp)

住 職 佐藤 俊明

副住職 佐藤 明宏

## 競演 第七回

# だん

「だん」もまた「暖」「弾」「壇」「男」「断」「ダン」「談」「段」と…。このコーナーは工夫次第でいろいろな発想豊かな作品の舞台にもなります。

男同士

小川悦子

ずつと幼い時は、男の子でも女の子でも、興味を持つもの以外は男女の違いがはつきり分らないが、ある頃から性別を感じさせる。

りおんが口にし始めたのは、今からどのくらい前だったのだろうか。

ある日、「パパみたいになりたい」と言った。「どんな風に？」と聞くと「背中が広くて大きいパパみたいになりたい。りーくんの背中は小さいから」

男の子だなと思った。

つい最近も幼なじみの女の子が、瓶の蓋を開けようとすると「これは女の力では無理や、男の力じゃないと。開けてあげるから」と言ったそうだ。

側で聞いていた娘はへえーと嬉しく思ったとか。

自分が男であること意識が確実に芽生えている。もちろん小さい頃から、「男の子でしょ」と言われながら大きくなつてはきたと思う。遊びも、キャッチボールやサッカー、相撲、戦いごつこと身体を動かすことが好き。男の子の特性なのだろう。

最近主人も感じるころがあつて、りおんのトレーニングを始めた。

子供用の自転車に乗せ、「しんどい、もうこげない」と言つても「もう少し頑張れ」と励ましている。そうすると根性をみせて目的のところまでこぎ続ける。その場所は日によつて、加古川の平荘湖1周だつたり、大きな池のまわりであつたり、海岸通りだつたりする。真冬でも暖かい日には、それは続いた。かじかむ手を吐く息で暖めてやりながら。終わつた後は、好きなアイスクリームジュースをご褒美に買つてもらえる。それを励みに頑張っているのだろう。

家に帰つてくると、二人は「男同士！」と言つて、こぶしとこぶしをくつつけ合う。見ていても微笑ましい。男の子はしだいに、バーバよりジージの方がよくなると聞いたことがある。それを聞くと少し寂しい気もする。まさしく男同士。今から主人は、将来二人で外国や国内を旅することを楽しみにしている。

ダン、ダン、ダン

高阪博一

《しがらみを断つて》

ノートパソコンのスイッチを切つた。蛍光灯が点いているは自分の周りだけだ。誰もいないフロアを見渡

した。こんなに広かったのかと鈴木さんは思った。もう、午後九時を過ぎていた。「さて、そろそろ帰ろうか。やつと、三十八年間の整理が出来た」 向こうの非常灯が仄かな青白い光を放っていた。

一月十五日の誕生日で満六十歳になった。会社の規定では、六十歳になった月の月末に定年退職することになっている。鈴木さんは大学卒業以来、ずっとこの会社にいる。いろいろな景気変動に遭ったけれど、給料は下がることはなく、それなりの地位にも昇進した。

引き止められたのだが、それは断った。明日は三十一日、退職の日だ。もう、働こうという気はない。

机の上を片付けた。パソコンだけになった机を眺めて、「まめに片付けていたつもりやったのに」としげんに言葉が漏れた。蛍光灯を消し、整理した私物を入れたバックを持ち、事務所の玄関を出て、鍵をかけ、工場の正門の方に歩いていった。大きな工場ではない。ほんの数十歩なのだが、ゆつくりと鈴木さんは歩いた、ほの暗い常夜灯の点いている中を。「やつぱり、二ヶ月はかかるなあ。三十八年のアカ、積もつてたなあ。これですつきりやから、明日は定時に帰れるな」 冷たい風がさつと吹いたので、鈴木さんはコートの襟を立てた。

上司は何かと気遣ってくれた。送別会はいつで、最後の日はこの時間、この部署に挨拶に行き、昼からは坐つてぶらぶらしてればいい、帰る時には花束を渡す等々いろいろあつたが、全て断つた。取引先や世話になつた人たちには、既に挨拶は済ましていた。明日、改めて挨拶するつもりは鈴木さんにはない。明日は三百六十五日×三十八年間分の一日にしか過ぎないと思つている。いつものように出社して、いつものように帰る。ただ、違つているのは、のんびり自席に坐つていて、誰も咎めぬこと、そして次の日の準備をしなくても良いことだった。

工場の重たい門を閉め、セキュリティを掛けた。「カードも明日、総務に返さな。俺が一番早く帰るん

やから：」自然に笑いが出てきた。「さて、歩くか。駅まで十分強。この寒い、暗い道ともお別れ。明日は多少明るいやろうね」ふと空を見上げると月が出ていた。何となく澄み切っているように鈴木さんは思った。「いつも見ているお月さんやのに……。詩ごころがあればなあ」疎らに点いている街灯の中を、駅の方に鈴木さんは歩き出した。

若い頃、上司に歩くのが遅いと何度か言われたものだ。別に悪いとも思わなかった。一向に直す気は起こらなかった。その上司は、また、「仕事に生き甲斐を持って」とよく言っていた。鈴木さんは黙って聞いていたが、特に肯定する気にもなれなかった。仕事はあくまで生活の手段だと思っていた。それは今も変りはない。特に生き甲斐を意識して、生きて来た訳ではないが、「生き甲斐を探してもいいな」と近頃思うようになっていた。

「還暦過ぎたから、また、赤ちゃんからの出発やないか。今までの六十年のしがらみはチャラ。皺の多い赤ん坊やけど：」と呟きながら、どうしたら『しがらみ』を棄ててしまえるか鈴木さんは考えてみた。難しいことは分からない。複雑なことを考えるつもりもない。ストレートでシンプルにと思っていると、「会社の仲間と付き合わなかつたらいい」という考えが浮かんできた。

六十年の半分以上は、会社で過してきた。だから、そこに『しがらみ』が最も多い。確かに世話になった人はいる。だが、それは仕事で返してきた。会社という枠が明後日からなくなるのだ。「もう、これ以上はええやろう」と何となく、妙に、鈴木さんは納得してしまっていた。明日で終るのだ。そこまでは給料を貰っている。来月の給料は貰っている訳ではない。全くのフリーなのだ。

「そろそろ、あの家やな」ぼんやりした門灯に照らされて、門柱の中に黒い木の影が見えてきた。「あれ

や、あの梅の木や」 鈴木さんは花や木に興味のある方ではない。かといって、全く無視する訳でもない。赤いや、紅ニという方が当て嵌まる梅の木を、何となく眺めて通り過ぎ、時には「綺麗やなあ」と思うこともあった。

いつ頃だったかはつきりしないが、今までに一度だけ、あの家の前で言葉に出来ないほどの香りを嗅いだことがあった。それは押し寄せるように迫ってくるのではなく、密やかでほんのりと漂う、透명한甘さというのだろうか、そんな香りだった。それは今日と同じ様に、残業で遅くなった帰宅時のことだった。

今朝はまだ薄紅の蕾が二つ三つあるだけだった。この暗い中、ちらつと横目でその木を見て、家の前を通りすぎた。「まだ、早い。一ヶ月、いや、半月遅かったら、もう一度嗅げたかもしれないのに」 もうその可能性がないかと思うと、どことなく悲しいような感じが鈴木さんを通り抜けていった。会社を辞めることには、こんな感情が特に湧いてこなかったというのに。

駅に着いた。改札を通過して、売店で夕刊のタブロイド紙を買って、プラットホームのベンチに坐っていた。いつもの新聞、いつものベンチだ。まだ、電車は来ない。もう数分かかりそうだ。するとまた、あの梅のことが気になりだしてきた。感傷的になつているのだと思つても仕方がなかった。夕刊を広げた。すると、頭の中を、短い詩が駆けめぐった。

「どんな」と集中していると、口をついて言葉が飛び出してきた。『思い出のあの香ゆかしき夜の梅』であった。「上手やん！ひよつとして、詩ごころあるかも？俳句が還暦後の出発点になるかも？そして、生き甲斐になるかも？確か、会社では誰もしてなかったよなあ」と鈴木さんは独り悦に入っていた。

電車が入ってきた。ドアが開いて人が降り、鈴木さんは中に入った。辺りに乗客は疎らだった。もう一度、

新聞を開けようとして、「一寸待てよ。『夜の梅』はなんか羊羹みたいやないか」と呟いて、鈴木さんは「う、ふ」と笑い声を漏らしていた。

《暖かな部屋で》

木蓮が柔らかな産毛に覆われたからを破つて、先の一寸巻いた細長い円錐形のような蕾を、今にも広げようとしている。十日ほど前だろうか、雪が降った。温暖なこの地方では珍しいことだ。さらつと乾いたような淡い雪であった。鈴木さんはぼんやりと、部屋の窓から外を眺めていた。

自分で試みて、保険等の手続きが煩雑なのに驚いた。役所に行つて、書類一枚書けば済むと思つていたのだが、あれもいる、これもいるで一度では済まない。何度か足を運ぶことになる。それに、人が多くて待ち時間が長い。年金の手続きなど一時間以上はざらな感じだった。「再就職すれば、こんなことせんでも済んだのに」 つい、そんな愚痴をもらしたが、仕事をしなくて済む贅沢を考えれば、どうというものではなかつた。

「さて、どうしようか、具体的に考えよ」

外を眺めるのをやめて、部屋の中を鈴木さんは見渡した。六畳ちよつとの広さに、古いベッドや机が置いてある。それに本やCDや埃まみれのグローブなんかも。「まず、放ろう。それから、自分のしたいことに応じて、物を入れればいい。決めた！」そこで何をしたいのか考え出した。「普通は辞める前に考えてるよなあ」と自嘲気味な言葉と共に。

『本を読むこと』はずつと鈴木さんの頭に浮かんだ。積読<sup>ツンドク</sup>は得意だったので、本は充分にある。それにこの

部屋の主、他県に居を構えている息子の置き土産の本もそれなりにある。材料は充分過ぎるほどある、料理できるか？ということだけだ。『詩ごころ』に自信はないが、読むだけなら、大学時分それなりに訓練している。

「今までは時間がなかったからだけや。これからは読める。手当たり次第や」 まったく、簡単に結論を出した。ものごとは単純に考えるのが良い。複雑に考えたからといって、良い知恵が浮かぶ訳でもない。「できる、きつと。それから、机を入れ替えよう。今度はガラスの板のがええ」 鈴木さんは愉しくなり出していた。一つでは心もとない。せめて、三つはいる。「自分に出来そうな、長く続けられることは、何やろか」 小さな部屋を歩き回っていると『ダ・ダ・ダーン』とあの有名な交響曲の冒頭部分が頭の中で鳴り響いた。即座に二つ目は決まった。『音楽を聴くこと』と鈴木さんは思った。「待てよ、頭の中で鳴り響くのはあの曲やったかな？」 何かの本に出ていたような、何となく別の曲のような気がした。「まあ、別に何でもええけど」 鈴木さんはまた嬉しくなってきた。

今まで、楽器や歌などやったことがなかった。そういう意味で、『音楽をする』こととは無縁だった。だが、『音楽を聴く』ことはぼちぼちと続いてはいた。高校時分に友人の家でステレオを聴かせて貰ったことが、そのスタートだった。目の前に演奏者がいるような気がしたことで、スピーカーが妙に大きかったのを覚えていた。「聴くいうてもなあ、さてどうしたらええやろ。聴くにもいろいろあるしなあ」 ぶつぶつ呟きながら、鈴木さんは椅子に坐つて考え出した。

『音楽を聴く』にも二種類ある。演奏会等に行くであり、CD等を聴くである。我ながら単純すぎるとまた鈴木さんは思ったが、どんどん先に思いを巡らせた。懐具合があるので演奏会は二ヶ月に一回とすぐに

決めた。それから、鈴木さんは悩みだした。「CD、聴くんやけど、どうせ聴くなら『エエ音』で、コンボはなあ、もう一つやし。ひよつとして、莫大な投資が必要になるかも：」。「莫大、莫大」と繰り返して苦笑いもれた。「スピーカー要るよな、アンプにCDプレーヤー、ごついやろうなあ」。「マニアックなものなので、どこで手を打つか？が問題だろう。鈴木さんは「さて、うちの大蔵大臣の機嫌のええ時はいつやろう」と楽しそうに微笑を漏らした。

こんなことを思っていると、直ぐに時間が経つてしまう。もう、かれこれ一時間程度だろうか、エアコンのない部屋が寒いことに、鈴木さんは改めて気付いた。一人息子が出て行って、十数年経つ。進学、就職、結婚といろいろなことがあった。二人だけなので、その間この部屋は使う必要がなかった。息子も住んでいる時は、居間にエアコンを入れるのが精一杯で、この部屋には入れる余裕などなかった。「この際やから、エアコン入れよ、一つも二つも、交渉は一緒や」鈴木さんには勝算があった。あれを言えば、多分という勝算が。「孫や、孫。それを最大限に利用しよう」と心に決めた。

息子が家族を連れて正月に帰省した時、この部屋で一人娘の孫と遊んだ。我々老夫婦が格好の遊び相手になる。三歳も過ぎると、それなりに喋れるようになってくる。この時分の成長はずいぶん早い。「お人形ほしいなあ」とか「おもちゃ、あれへん。お家から持ってこよ」と何やかや言いながら、孫は我々老夫婦と遊んでくれる。

機嫌の良い時は天使のようなのだが、気に入らないことがあると、猛獣のような鋭い牙を無邪気な表情に隠して、このいたいけな(?)老夫婦に襲いかかってくる。「部屋、寒い」と言つてこの部屋に入ろうともしないことがあった。その時の大蔵大臣の複雑な表情を見逃してはいない。

「エアコン入れて、冬は暖かく、夏は涼しくしよう。あの子が風邪をひかないように、汗疹アセトもできないように」これが殺し文句、きつと落ちるに違いない。鈴木さんは確信を持った。だが、残る大きな問題、『莫大』なものについてどう言ったら良いか、薄くなつた頭を掻きながら、また考え出した。

ひたすら、頭を下げてお願いする。これでは余りに芸がなさ過ぎるし、多少の自尊心もある。ヘソクリを拠出する。これをするところらが干上がってしまう。いくらなんでも、妥協点は半分程度だろう。交渉の前から、随分弱気だと鈴木さんは思ったが、なかなか良い知恵が浮かんでこない。

「もう一度、孫を使おう。情操教育に音楽がええ」とかなんとか言つて丸め込もうと鈴木さんは思った。「ヴァイオリンを習わせようと思つている」と先日、大蔵大臣に息子からメールが入つたそうだ。それがどれ程先になるかは分からないが、その時に備えて音楽環境を我々も整えておこう。今から『エエ音』を聴かせておくと、天才ヴァイオリニストと呼ばれるようになるかも知れないと言えば、何とかなりそうな気がしてきた。暫くするとこれもまた確信に変わった。「きつと、OKする。単純すぎるけど…」と鈴木さんは薄つすらと笑いを浮かべていた。

これでどうにか二つの目処がたつた。「品物は早いめに決めな！ネットやな！」鈴木さんは静かに眼を閉じた。孫と遊んでいる姿が浮かんだ。窓の斜め上にエアコンが嵌つている。外は雪がちらついているが、部屋の中で着ているのは薄いセーターだ。目の前に大きなスピーカーがある。「これや。この感じや」鈴木さんは誰に言うともなく言葉を出して、傍らのメモにさつと字を書いた。

それは十七音の短い文章だつた。『暖かな孫と曲聴く部屋のみか』「ひよつとして、才能ありかも。待てよ、季語がないなあ」と苦笑いを浮かべながら、鈴木さんはあの時の『夜の梅』を思い出していた。

《こころ弾ます》

桜は長く見ていられる。先ずは咲く時だ。薄紅の花は春のうきうきした気分にびつたりする。そして、散る。雪が降るように、風に舞い散る、好ましい風情だ。それが、小川にでも落ちて、流れていれば尚更だ。『花筏』

誰が言ったのだろう。華やぎのなかにゆかしさを感じさせる。だが、切なく哀しい。水の流れが花を連れ去ってしまったと、青々とした葉が一斉に出始める。きらきらとした光に包まれていると、まもなく、長い雨に打たれる。すると、その葉が一層の輝きを増していく。

長い雨の頃がやつと終ろうとしている。鈴木さんは部屋の中で、本を読みながら、CDを聴いていた。大きなスピーカーが二メートル程先に、二台座っている。斜め上を見ると、エアコンが除湿機能を働かせていて、快適この上ない。「何でもつと早よう、入れんかつたんや。早よう入れとくべきやつたなあ」ボサノバの軽いリズムを感じながら、雨の止んだ窓の外を鈴木さんは眺めた。

大蔵大臣との折衝では一方的に押しまくられた。基本的に『ない袖は振れない』ということだった。孫の可愛いのは当然なので、なにがしかの負担はする。しかし、ステレオは個人の趣味の問題なのだから、個人負担が当然のことだ。数冊の通帳や書類が目の前に置かれた。預金通帳、年金振込明細、それにいろいろな支払明細であった。勝負はついた。

悲しそうな眼で大蔵大臣を見ていると、「三十八年、働いていたら、埋蔵金が何処かにあるのではないか。正直に言えば、復活折衝を前向きに検討しても良い」と優しい言葉が返ってきた。この慈母のような『前向きに検討』に飛びついて、鈴木さんは埋蔵金の額、その在処を正直に申し述べた。「持ってたんや。貯めてたん

や。黙ってたんや」大蔵大臣は落着いた低い声で言い放った。その顔には、結婚以来どこに隠していたのかと思うような笑みが浮かんでいた。

かくて、埋蔵金はチャリンという小判一枚程度に減ってしまった。今思うと何故あの時、通帳が出てくる前に、アメリカやフランスのパンフレットを出さなかったのか？と鈴木さんは思う。そうすれば、埋蔵金はもつと残っていたように思う。この後でするから後悔なのだろうが、六十にしてそれが分かるなんて、鈴木さんは悲しいと思った。

かけていたCDが終った。机の上にある新聞を取り上げた。家にいるようになって新聞をよく見るようになった。時間がある。読んでいると、結構、時間がかかる。それに思わぬ情報も掲載されていることがある。「会社では新聞、読めへんかった。暇そうに思われるの、嫌やつたし」久しぶりに会社でのことを鈴木さんは思い出した。

退職以来、会社関係の人には連絡しなかつたし、向こうからも連絡はなかつた。この点ではしがらみは断つていた。だが、断つたと思つても、昔のことが頭を過るのは、往々にしてあるものだ。記憶は消せないかもしれないが、薄くすることはできる。「時間つて、いい仕事するよね」と鈴木さんは静かに微笑んだ。

新聞を開くの中に、ミニコミ紙が入っていた。『三つ目』を探して、自治体の刊行するパンフ等に目を通すことが多くなっていた。何かないかと注意しながら見ていると、小さな冊子を胸の前に掲げた同年だと思われる男性の写真が、鈴木さんの目に留まった。記事を読むと、同人誌のアップीलと同人の募集であった。

同人誌の名前は『アカンサス』、ギリシャの装飾文様だそうだ。人間の精神活動を彩る装飾するのは文藝ではないかとの命名理由だった。「難しそう」止めようかと鈴木さんは思ったが、写真の男性の優しそ

うな笑顔につられて、記事を読み進んでいった。

趣旨は書くことを楽しむことで、既に第二号まで刊行しており、ホームページも立ち上げている。同人は二十台か六十台まで幅広く十二人で、月に一回合評会を行っているとの内容だった。「珍しい、二十台の人がいるんや」老人大学のクラブ活動や老人のボランティア活動の記事を見飽きていた鈴木さんの眼には、非常に新鮮に映った。記事の最後にジャンルは問わないと書かれていた。

「今まで、したことがないことをするのが目標。知らない人と知り合いになる縁を作ることも目標。できるかどうかは別にして、やってみても……」と思うと、鈴木さんはパソコンのスイッチを入れていた。開いたホームページを読んでみると、既刊の二号分が掲載されていた。短篇あり、随筆あり、和歌や俳句ありで『寄せ鍋』ようだった。文章を書いたことのない鈴木さんには、良い悪いの価値判断はできなかつた。しかし、魚やかしわや野菜や春雨が、鍋の中で、熱く煮えたざり互いに出汁を出し合つて、美味しい『寄せ鍋』を作っているような気がした。

「入ろう。できるかどうか分からんけど、先ず、やってみよう！や。万が一、賞でももうたら、うちの大蔵大臣、特別予算を組んでくれるかもしれん。『三つ目』は決まりや、『ものを書くこと』に」鈴木さんは何となくうきうきする心を感じていた。この数ヶ月、感じたことのない弾むような気持ち。

載っていたアドレスに「興味を持っています。刊行物をお送りください。また、合評会の日時をお知らせください」とメールを打った。ところで、何を書いたら良いのかまったく鈴木さんには見当がつかかなかつた。原稿用紙一枚は書けそうにもなかつたが、原稿用紙一行なら書けそうな気がした。「当面は俳句かなあ。短いほど難しい気もするけど……」と何処となく不安が過つた。

すると、過つた不安のあとに、ばつと言葉が閃いた。『五月雨のあとに輝く露一つ』という俳句だつた。『羊羹』でも『季語なし』でもない。「露三つのほうが：？」と多少迷つたが、季語もあり、自分の感情もそれなりに入つているので、「今のところは、これでええか」と鈴木さんは思つた。「楽しそう。ひよつとして、生き甲斐を見つけられたかも」と経験のない合評会での交わりを想像しつつ、鈴木さんは心の中に湧き上つてくる何かを感じていた。

了

ほらふき男爵の冒険

大西亥一郎

先は大陸から来た人の流れを汲むのだ。

なに、日本人じゃないのかつて。お前、元々日本人というの、蒙古斑で判るように大陸が出身地なんだよ。俺は真正正銘の日本人だから、この歳でも『ケツが青い』んだ。

ま、それはどうでもいいことで、俺は実に様々な冒険をしてきた。

聞きたいかね、そうだろう、聞きたいに違いない。それでは宇宙人に会つた話をしてやろう。

なんだ、初めからほらだつて、宇宙人なんていないんだ、つて言うのか。

お前さん考えてみたまえ、宇宙というのは140

俺は男爵である。  
なに、今はもうそんなものは日本にいないつて。それに、タイトルの「ほらふき男爵の冒険」つてミュンヒハウゼン男爵カール・フリードリッヒ・ヒエロニムスの話した内容を元にしたお話だつて。お前、しつつかぶつた奴だなあ。得意そうに長い名前を言うなんて。そんな事はどうでもいいじゃないか。俺は男爵なのだ。

いいかね。自称男爵ではないよ。もともと俺の祖

億年程の年齢なんだよ、地球は40億年程だから、地球人というのは新参者なんだ。

『宇宙憲章』というのがあってね。新しい種族に対しては原則自力で恒星間旅行が出来るまでは、他の種族は接触してはならない、という決まりがあるんだ。

そう、恒星つて言うのは太陽のような燃える星の事でね。つまり人間はお隣の太陽まで行ける力が出れないと、他の宇宙人には相手にされないんだ。

なんだつて、それなら宇宙人になんて会えないじゃないかって、それはそれ、どこにでも勝手な事をする奴はいるもんでね。

あれは暑い夏の夜の浜辺だったねえ。

俺は、パーティにも飽きて、ビーチを散歩していたさ。なにせ、俺の居館は南の小さな島なんだがね。ほんの50平方キロだが、南の砂浜は長さが4キロ程ある。

月がきれいでね。白い砂浜は青く濡れていた。

突然、浜辺の水がわつと盛り上がつてね。波しぶきとともにダークグレイの丸い岩山が現れた。大きさはそうさ、俺の持つている小型の潜水艦、それと

同じくらいかな。

俺はちよつぱり慌てたね。パーバリーのパンツが汚れる。

少し退いて眺めていたら、岩山の頂上から白い光がにじみ出して、人のような影が現れた。

「わては宇宙人どす」

ちよつと高い男の声でそいつは言った。

なに、そんな事言うか、だつて、そりや言うさ、我々だつてよその国に行つたら、日本の誰々つて言うだろう。

ま、そいつは続けてこういった「わての名は、ブラーナ・ナシヤルヴォヴィツチヘン・ペテルヤクジャワ・ガントルネン」とね。

まあ、名乗られたら、俺も答えねばならない。

「我が名は、武者小路・綾小路・姉小路・横・上る・太郎左右衛門輔五郎石井の介である」と俺は大声を上げた。

お互いチト名前が長いので、ブラネンと武者介ということにした。

なに、そんな事はどうでも良いから、どんな宇宙人が話せて、よし、その宇宙人は岩だった。すべす

べの岩石で真つ黒だった。人間の形をしていたが、眼の辺りに灰色のくぼみが3つあり、口の辺りに穴ぼこがあった。そこから声がでるらしい。手の先には三本の柔らかい岩というとヘンだが、ピンセットみたいな指が伸びていた。服は着ていない。

ブラネンは、俺に岩に乗れと言った。ちよつと宇宙旅行をさせてやろうというのだ。

俺が頷くと、俺は丸い岩の宇宙船の中にいた。

驚いた事に、岩の中はやはり何でもかんでも岩で出来ていた。もつとも、様々な色にペインティングされている。それもグラデーシヨンのようなアナログ的な色彩である。

なに、グラデーシヨンつてなにかつて、ウムム、それは…、話の腰を折るな。

で、天井からと言うより部屋の中全体が明るい。発光金属というもので覆われているのだそうだ。

外からはわからなかつたが、中にいると正面が大きな窓になっていて、半分くらい海の中だ。

「いきまっせ」

と目を白黒させている俺にブラネンが言うのと、波がザブンと揺れた。

すると目の前に地球が浮かんでいた。

重力を遮断するし、亜空間を移動するので、月までくらいならほとんど時間はかからないらしい。

地球は青かつたね。

それからフツと景色が揺れると、薄赤い大地が広がっていた。火星だね。驚いた事にブラネンは外に出て手を振っているじゃないか。なにせ身体も岩だからね。空気が無くてもいいし、温度も絶対零度近くから800度くらいまでは平気らしい。もちろん圧力にも強い。

「地球人はお弱いのでお無理でしょうがねえ」

と、些か哀れっぽく言う。

俺はちよつぴり腹が立ったね。しかしまあ言われてみればその通りだ。岩石人間というのが宇宙では当たり前の知的な生命なのかも知れない。

それから木星に行つた。ばかでかい星だ。エウロバという衛星には、どうやら原始的な生命がいるらしいが、木星には大気を漂うモクモクトンという傘のお化けのような生物がいたね。こいつはね、高度な生命体なんだが、物質的な文明がない、精神的なものだけで、『宇宙憲章』に該当するかしないか問



総目次 1号から10号

**1号 創刊号** 発行 2009年(平成 21年) / 1 / 1

随筆…平成二十年十一月九日小春日和 永井組若芽  
俳句…絵本部屋 彩華

随筆…義母へ 小川悦子

随筆…僕と神戸 柴小路秀磨

随筆…来ひーん物語 大西生一朗

〔設立集会〕

柳歌…メタボの世紀 石川柳歌

◆往復書簡―ご返事 明達光輝

**2号** 発行 2009年(平成 21年) / 4 / 1

随筆…僕とランニング 柴小路秀磨

随筆…ももに誓う 永井組若芽

俳句…小川悦子・高島成子

中学一年の創作集

童話…赤い糸 はなのはなこ

随筆…肥満糖尿山へのぼる 大西生一朗

短歌…冗句川柳…小川悦子・高島成子

柳歌…生切る音ミシミシミシと老いの音 石川柳歌

短歌…詩…大西隆史

短歌…明達光輝

**3号** 発行 2009年(平成 21年) / 8 / 1

随筆…あまのじやくじやく 永井組若芽

随筆…『走る貴婦人』に夢をのせて 水田竜子

俳句…青春三句 秀磨

詩…勿忘草 大西裕子

随筆…忘れものつて? 高阪博一

随筆…マインドストレッツ 大西生一朗

富田碎花とその周辺

例会報告

柳歌…石川柳歌

詩…おかえり・世界で最も残酷なことを知っているだろ

うか 大西隆史

短歌…立ち竦む恋 明達光輝

詩…日曜日 はなのはなこ

**4号** 発行 2009年(平成 21年) / 12 / 1

エッセイ…昼下がりの神戸線 高阪博一

詩…ゴスペル バーラ・カッシー

短歌…秋のヒロイン 高島成子

詩…4編 大西裕子

俳句…冗句…夢幻草・音色今駱駝

3号雑誌とぼく「1」…大西 生一朗

2009年度姫路日ノ本短期大学幼児教育科学学生作

品最優秀賞受賞作

シヨートシヨート…切符の裏は何色?

エッセイ…精神病院闘病記 豊川宣行 谷口佳奈

エッセイ…老人日記1 百天翁伽

詩：4編 大西隆史  
 短歌：6首 柴小路秀磨  
 エッセイ：夫が癌になつちやいました 水田竜子  
 競演第一回『あついで夏』：「高阪博一」「夏子」「パーラ」  
 カッシー「今路駝」「大西生一朗」

**5号** 発行 2010年(平成22年) / 2 / 1

随筆：暑い夏アラカルト 高阪博一  
 俳句：よく笑う 彩華  
 短歌・俳句：街路樹ロマン 高島成子  
 俳句：京の秋 彩華  
 老人日記2：百天翁伽  
 川柳：柴小路秀磨  
 嘘つきメール・他：令月  
 詩「願掛け」：大西裕子  
 短歌：水田竜子  
 病気の事情：高島成子  
 競演第二回：『ほし』（6号で『競演』の整理をした。）

**6号** 発行 2010年(平成22年) / 5 / 1

さつま芋：額田沙織  
 春句：額田沙織  
 秋桜：夏子  
 人間と掛けまして、ホタテと解く：太田隆一  
 あーあ『光るの君』、よーし『源氏の君』：高阪博一  
 ビッグマザー：明花

干す：永井組若芽  
 星に願いを：高阪博一

自句自解：彩華  
 俳句：高阪博一  
 詩二編：大西裕子  
 僕と海：柴小路秀磨  
 『ライ麦畑』で『卒業』して：高阪博一  
 春つげる：水田竜子  
 精神病院闘病記(2)：豊川宣行  
 詩二編：大西隆史  
 競演「ハル」：令月・高阪博一・大西隆史・はなのほなこ

**7号** 発行 2010年(平成22年) / 8 / 1

随筆二編：小川悦子  
 俳句：夏子  
 童話「りーくんと月」：ゆきんこ  
 薄紫：奮闘記その一：高阪博一  
 不純物：大西隆史  
 登山不適格者パート2：伊藤雪山  
 編集模様(亥一郎)  
 詞：令月  
 偽りの歴史書：早蕨椿  
 例会報告  
 1 競演 うみー  
 恐怖と安らぎの世界・空に愛された海の底で：大西裕子  
 おもがわりの海：高阪博一

天上天下：大西隆史

**8号** 発行 2010年(平成 22年) / 11 / 1

殺し屋の住人：大西裕子

孫を見送る父親の寂しさ：小川悦子

筆の先生と尖尾鳳2010：7：伊藤雪山

タイムマシーン：永井組若芽

カラの空のその先に：大西裕子

夕暮れのベンチで：高阪博一

雲：今月

君といた夏：明花

十五夜三句・孤独：大西隆史

続リーくんと月：たからもの：ゆきんこ

俳句(春うららー君の温もり)：夏子

(日記)：柴小路秀磨

ー競演あきー

想うはあなた一人：今月

秋晴れ：大西亥一郎

秋のさまよい?：高阪博一

ひとこと、ふたこと、みことによこと：大西亥一郎

**9号** 発行 2011年(平成 23年) / 2 / 1

知られざる戦争の傷跡バスツアー：伊藤雪山

夏の海Ⅱ「俳句」：夏子

父：小川悦子

お肌にシミが：大西亥一郎

呟き集：今月

偽りの歴史書二：早蕨椿

薄紫：奮闘記その二：高阪博一

愛しき「モノ」達よ：柴小路秀磨

ー競演 かんー

さざんかの咲くころ：永井組若芽

爛：大西隆史

カン暇な老人の話：高阪博一

感謝：大西裕子

**10号** 本号 発行 2011年(平成 23年) / 5 / 1





◆明石市立衣川コミセン  
(コミュニティセンター)  
〒673-0025 明石市田町2丁目1-18  
電話 / 078-922-4700  
ファックス / 078-918-5965

◆例会は第2土曜日です。15時から 明石市立衣川コミセン  
以後も第2土曜日、15時からの予定です。  
出欠のご連絡は不要です。

◆四月から、明石市立衣川コミセン(上図  
・所在、連絡先)になりました。改めてご連  
絡しませんので、参加される場合はご注意  
ください。

※アクトスのHPは、  
<http://www.justmystage.com/home/actos2008/>

◆パソコン用HPに**掲示板**を作成  
しました。ご利用ください。

※アクトスは「行動する人」の意。

編集室から

次号(第11号)の原稿締め切りは6月末。

10号

ということ、設立からをふり返つてみた。

自分の思い、歩み、例会、人の出入り、葛藤：、人間の集団というものは、このように小さなものでもいろいろとあるものだ。

総目次もつけた。これを見るだけでも、会員には歴史がわかる。

このアクトス10号に初めて原稿が載ると言う方も2名いる。会員が増えるというのは嬉しいものだ。

※

実のところ、「アクトス」が「トキワ荘」のような場所にならない

いかと考えている。「トキワ荘」というのは手塚治虫を中心として、寺田ヒロオ石ノ森章太郎・赤塚不二夫藤子不二雄らが住んでいて、「マンガ荘」とも言われた東京の木造アパートである。

といつてここに入るには、実は申し合わせがあつてその中の次の点は「アクトス」でも大切にしたいと思う。

つまり、「協調性があること」と「本当に良い漫画を描きたい」という強い意志を持つていること」である。もちろん漫画は「文章」と読み替えてもらう。

僕も若い頃は相当心理的に不遜な態度があつて、自分の作品を批評されると、領きつつ納得しないという書き手であつた。自分を持つと言う意味では

悪い事ではないが、自己反省しないと前に進まない。「良い文章を書くには、協調性つまり『懺悔心』がないといけない」と思う。でまあ、食べられる程のプロになれるかどうかはともかく、素人でありつつ、楽しみでありつつ物書きのプロ集団としての場でありたいと考えている。

※

さて、10号ある。ほつとしていゝる。一区切りだ。

10号までを国立国会図書館などへ送つておくつもりである。会を立ち上げて3年。司会も会計も、会場確保、準備、編集、冊子作り、発送等とやってきたが、昨年辺りから高阪さんや瓜生さんを始め皆さんに助けられている。ありがたい事だ。しかしそれに甘えないで20号目指し

て、組織をきちんとして分担も  
お願いしたい。どうかよろしく。

「亥一郎」

◆競演第8回 今回は、「てん」とテーマを決めました。「天高く馬肥ゆる秋」といいます。つまり「秋」を軸に考えて下さい。「てん」が入っていなくても、「てん」らしきものが感じられれば良いのです。もちろん、飛躍的な発想も大歓迎です。



◆入会するには◆

- ①会費1年分(12000円)を下の振込先に振り込み
- ②〒・住所・氏名(フリガナ)・年齢・職業

を明記の上、※振込用紙の通信欄記載でも可

〒673-0031 明石市宮の上1の17の614

大西方 アクトス編集室 へ、お送りください。

◆会費等振込先◆

郵便局

口座:00900-5-39616 大西 生一朗

※記録が残りますので、振り込みして下さい。

◆ **合評会** 毎月第二土曜日

※午後 3時～5時

◆ 場所 **明石市立衣川コミセン**

〒673-0025

明石市田町2丁目1の18

電話 / 078-922-4700

ファックス / 078-918-5965

※明石市立衣川中学校から西へ一分

・ **山電** 西新町から南へ徒歩約5分

・ **JR** 明石駅から西へ徒歩約20分

・ 駐車場有

**アクトス 第10号**

平成二十三年五月一日

編集 大西亥一郎

発行

〒673-0031

兵庫県明石市宮の上

一の十七の六一四

大西方

大和評論社「アクトス編集室」

Tel&Fax 078-922-4562

actos2008@mbe.nifty.com

非売品（頒価）500円